
羊

シユール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羊

【ZPDF】

Z0870D

【作者名】

シユール

【あらすじ】

山田一男は十四年勤めた会社を辞めた。その後、彼にはさまざまな災難が・・・。

俺様・・・ハローワークにて

1

十四年勤めた会社を辞めた。

仕えた上司がみんなバカだつた。五年前に親会社に吸収され訳の分からない人間がどんどんと上のポストに着き始めた。お荷物の事業部だつたため次々と事業の規模が縮小され大阪の営業所が万博で元氣づく名古屋営業所の傘下に下り閉鎖された。両親が偶然にも一年置きに同じ左脚の付け根にセラミックを埋める手術をして色違いの杖を突き始めた。等々いろいろあつたが結局は、この俺様がこんなところで終わるわけがない、が一番大きな理由だった。

会議室に人が集まり始めた。

辞めた会社に入社した時、総務課に配属され、社会保険を担当していた関係生まれて初めて行つた職安と比較すると、建屋といい職員に女性が目立つことといいかなりイメージが変わり、名称もハローワークに変わつたが、来ている人間は、十四年前と全く変わっておらず、輪郭になにか塵みたいなものが付着していた。

説明会が始まった。

首からIDカードをぶら下げた顔に締まりのない職員が、ビデオを交えいろいろと説明をする。

「自己都合で辞められた方の次の認定日は三ヶ月後の六月・・・」

会社が倒産したり、リストラで解雇された人達はすぐに雇用保険が貰えるのに対し、自己都合、要は自分から自らの意志で会社を辞めたものは三ヶ月間受給が遅れるらしい。

会社の倒産はしょうがなくにしても、仕事ができなくて肩を叩かれた人間がどうして優遇されるのだろうか？この国の法律はできない人間にどうして手を差し伸べるのだろうか？彼らは退職金にしても上増しをもらっているはずだ。こつちは、上増しなどもらつておらず、バブル全盛期に国立のＫ大学を卒業して、日本の会社なら

2

どこへでも入れたのに、モノづくりの大切さを認識しているからこそメーカーに就職し、十四年間勤め、そして、いろいろと考えた末、自らの志を持つて会社を辞めた、にもかかわらず待遇に差があるのは一体どういうことだ。

雇用保険なんか惠んでもうつほど俺は情けない人間じゃないよ、と心の中で捨て台詞を吐いてハローワークを出た。

約束の時間より十分早く到着すると、「あいにくまだ高木は会議中でして」といつて五十歳くらいの女性が温かい緑茶を出してくれた。

夕方の五時と言えば、辞めた会社なんかは電話が鳴り響きフロアー全体が騒然としていたものだったが、高木さんがT大学を卒業して昔の大蔵省で勤めた後天下った財団法人のフロアーは、正しく“静かな週末の午後”だった。

「すいません、お待たせしまして」

高木さんは、両脇にたくさん資料を抱え、五時ちょうどに俺の目の前に姿を現した。

「K大学の経営学部ですか、何人か私の友達にもいるんですよ」初対面の高木さんは、思っていたより年配だったが、グレーのスリーブを品良く着こなし、とにかく背筋がすっと伸びていた。

「前の会社はどうしてお辞めになつたんですか？」

「まあ、いろんなことが重なつたんですけど、元もと仕事にやりがいを感じてなかつたのと、会社が合併しまして、事実上吸収されたんですけど、上にどんどん人が入ってきて、あつち行けこつち行けつて飛ばされるようになつて、こら完全に飼い殺しにされるなあ、辞めるんやつたら四十なるまでに辞めんと次の会社探すのに苦労するなあと思いまして思い切つて辞めました」

この時俺は、転職するのに支障がない年齢のリミットを四十歳だと考えていた。

「前の会社ではどれくらいお給料もらつていました？」

「年収で六百五十万円くらいです」

「退職金は？」

「三百万です。」

「それは高いんですか、安いんですか？」

「さあ、どうなんですかね」

緑茶をすすつた。

「食品メーカー、もしくはビールメーカーを」希望と云ふことです
よね」

「はい」

「なかなか、こういった消費財系は求人がないんですね。特に関
西は冷え切つてますから」

今回の件は、義兄が心配して話を持つてくれた。

三十八になつた俺のことをいまだにカズ君と呼ぶ義兄は「カズ君
の経験だと職安でなんかきつとみつかないよ」と言つて高木さん
を紹介してくれた。

「一部上場を含めた関西の企業ならほとんどの所は顔がきくから」
義兄も大学を卒業した後、高木さんの紹介で関西の中小企業に入
社し、今は東京進出を果たして入社時より売り上げが一桁伸びた会
社の営業部長をしていた。

「前のお仕事の経験を活かすことは考えていらつしゃらないんですね
か？」

「ええ、できれば違つた業種へいきたいと思つてますので」

俺がそう言つたとき、「顧問、お電話が入つております」と、緑
茶を入れてくれた女性が開け放しになつた部屋の扉の前に現れた。

「ちょっと失礼します」

高木さんはゆっくりと立ち上がると、デスクまで歩き、受話器を
とつた。

俺はその間に、十個しか入つていないので三千円もした和菓子の
袋を女性に渡しにいった。

「皆さんで召し上がるつてください」

女性は恐縮しながら、電話を掛けている高木さんに和菓子の袋を翳した。

「すいませんね、お気を使つていただいて。」

テーブルに戻ってきた高木さんは目尻にしわを寄せた穏やかな笑顔を俺に向けた。

「お忙しそうなのでこれで失礼いたします」

立ち上がった俺を高木さんは止めなかつた。

「では、いろいろと当たつてみますので」

ほんまはもうどつか日星着けてんねんやろ、そう心の中で一人ごちた俺は、大阪のど真中に立つ財団法人の建屋を後にした。

「どうやつたん?」

妻が聞いてきた。

「どうつて、まああんなもんちゃうかなあ。

一ヶ月後には、つか一部上場の企業でも紹介してくれるんぢやうか。

「あんた甘いで。

バブルの時とは時代が違うんやで。

今の学生なんか三回生の時から就職活動してるつて言つてたで。
それでもなかなか決らへんて

「アホか。

そんな学生はな、ほんまの大学生やないんや。

今は子供の数が少ななつたから、偏差値が四十や三十でもいくらでも入れる大学があるんや。

俺らん時やつたら、人に聞かれたら言うのが恥ずかしいような大学でも堂々とコマーシャルを流して、また入つた奴も胸張つて私は大学生ですって言つてるやろ。

そんな奴らがまともな企業に入れるわけないんや。あいつらが大學生の就職率を下げるんや

「そりかなあ。

今はどこの大学を出でるんやなくて、持つてゐる資格がもの言つんちやうの。

あんた、英語もしゃべられへんし、持つてゐる言つたら車の免許だけやんか。

中途採用やねんから言つてみたら企業としては即戦力を期待してんねんやろ

「アホか、人間は総合力や。

英語しゃべれても分数でけへん、人の目見てようしゃべられへん、そんな人間を企業はとるか？

どんなアホな人間でも、大学や言いながら専門学校みたいに四年間英語ばっかり勉強して、半年や一年海外留学したら、片言の英語くらいしゃべれるようになるわ。

そんな奴らに負けるわけないやないか。

俺はK大学を出て、一部上場企業に就職して、十四年間ちゃんと働いたんや。何社も点々と会社を変わってきたわけやないんや。

きれいな履歴書やで

「まあ、それはそうやねんけど、時代があ・・・」

2

妻の予想は当たつた。

四月になつても五月になつても、そして、雇用保険の支給が始まる初めての失業認定日（あなたは間違いなく失業していますと認められる日）の六月の最後の金曜日になつても、高木さんからの電話はなかつた。

「ほらな、私の言つた通りやんか

妻が、晩御飯の定番になりつつあつた野菜炒めに次いで晩御飯の定番になりつつあつたカツ丼にお湯を注ぎながら言った。

「アホか。

高木さんわな、俺の経歴と照らし合わせて、しょうもない会社紹介したら失礼にあたるなと思って、慎重になつてはんねや。

分数でけへん学卒やつたらどこでもええわで済むけど、K大学出たエリートにはそんなことでけへんと、あの人自身もエリートやらその辺はわかりはるんや」

「はいはい、エリートの話はよつわかつたから、早よ食べて行つてきい。貰えるもんも貰われへんようになるで」

「雇用保険なんかまさか貰うなんて夢にも思わんかったわ。ほんま、

屈辱や」

俺の本心だった。

指定時間ぎりぎりにハローワークに入ると、フロアには三十人くらいの受給者が国からの“お恵み”を待っていた。

「山田一男さん」

水槽の中で泳ぐ熱帯魚を擬似魚と間違えているのに気づいたとき、係の人に名前を呼ばれた。

「六月十六日から六月二十四日までの九日分が支給されます。振込は約一週間後です。

次回の認定日は七月の一・十一日です。

それまでに、最低一回の就職活動を行なつてください」

フロアを一階下りると、百台くらいのデスクトップのパソコンがフロア一狭しと置かれていた。

ここで職を探すと一回の就職活動と見なされます、と説明会で言われていた。

百十三番の席は、高速道路が見える窓際の席だった。

キーボードで条件をインプットする。

正社員、営業職、三十八歳、月給三十五万円以上。

画面に現れた会社は、住宅リフォーム関係と、生保、損保のファイナンシャルプランナー、要は保険の勧誘員で、学歴不問、やる気のある方歓迎、歩合制月百万円以上可、という会社ばかりだった。“K大学卒業”という紋所を翳し、毎日通勤するだけで月に三十五万円くれる会社などどこにもなかつた。

やつぱり義理兄が言う通り、俺の経歴に合った会社などここには無いんだと諦めかけていたとき、最後のページの一一行に目が止まつた。

“大輝セミナー”

弁護士や税理士、また国家公務員を目指す人の為の予備校だつた。

幹部候補生募集

大卒以上 四十五歳位まで

月給三十五万以上”

画面をアウトプットすると、求人申し込みの窓口へ行つた。

「山田さん、三人の募集に二十人が応募してきてるらしいんですけどどうされます?」

係の人が電話を肩と耳の間に挟みながら聞いてきた。

「ええ、お願ひします(どうせ大した人間なんか来てないと思いますので)」

電話を切つた係の人が、「この紹介状と履歴書を郵送してください。一週間くらいで書類選考の結果を連絡する言つてますので」と言つた。

帰り道、退職後すっかり移動の足と化した自転車を漕ぎながらもう一度求人票に目を通した。

“ 資本金 一億円 売上高 五十八億円 ”

辞めた会社より二桁低かつた。

「どれくらい貰えんのん?」

リビングに入るとすぐに妻は聞いてきた。

「一回目は締めの関係でわざかや。

九日分やから六万ちょっとや。一週間後に振り込まれるって

「次からは正味貰えんのん?」

「おう。

それでも十七、八万や。働いてたときの半分もないわ

「ええやん、もらえるだけ。

その間にちやんと次見つけや

「一つまああなんあつたから一応申し込んできた。

三人の募集に二十人きてんねんて」

「そんなん無理なんちがう」

「アホか。

ハロー「ワークに募集しに来る人間なんか口クな奴あるか。
俺の履歴書送つてびっくりさせたろか。

おい、履歴書つてどこで売つてんねん?」

「コンビニで売つてんのんちがう」

「写真も撮らなあかん。

「どうか知らんか」

「駅前に自動のやつあるわ」

「やっぱリスーツ着て撮らなあかんのかな?」

「当たり前やんか。

「アルバイトと違うんやで。」

「そりゃか。

俺ら就職したときなんか履歴書なんか書かへんかったからな。
手ぶらでいいですよ、とにかくお越しください、そんなんやつた

もんな

「今は、整形する子もおるんやで、第一印象が大切やからいひで」

「女の子やろ?」

「何言うてんのん。

「男の子もするんやで」

「マジで!?

「みんな大変なんやな」

「みんなって、あんたもその中の一人やねんで

「アホか。

俺は、そんな奴らとは人間の次元が違うんや。

会社に頭下げて、どうか入れてくださいって言うのは何の取り柄
もない奴がすることなんや。

見といてみ、履歴書が届くやいなや、どうかお会い頂けないでしょうかつてすぐに電話掛かつてくるわ

履歴書を送つて二日後、本当に「是非お会いしたいのですが」と大輝セミナーから電話が掛かつてきました。

「なつ、みてみいな。

俺はただの失業者やないんや、格が違つんや」

電話があつた日の週末に大輝セミナーを訪れた。

一百人くらいは入れるような大きな教室に、同じ歳くらいの男性が四人背を丸めて座つていた。

みな、会社概要のパンフレットを真剣な面持ちで読んでいた。

(こ)の程度の会社でそんな真剣になるなよ。)

眼鏡を掛けた白髪のいかにも人の良さそうな男性が「お待たせいたしました」と言って教室に入つてきた。

「会社概要を簡単にお話した後、筆記試験を行ない、その後面接を行ないます」とその男性は言った。

予備校を経営しながら、自然食品の販売も行なつていると聞いて不思議に思い、筆記試験で、“あいさつ”を漢字で書くことができず少しショックに思い、面接の順番が氏名のあいうえお順で一番最後だということがわかつてうんざりとした。

待つている間、アンケート用紙を一枚渡された。

“煙草を吸いますか？”

「はい」

“今すぐにやめることができますか？”

「いいえ」

“いいえ、と回答された方はなぜですか？”

「やめる必要が無いから」

五回目の大きな欠伸をしたとき「山田様お待たせいたしました」と別室に通された。

会社概要を説明してくれた男性と、彼より少し若い、髪を七二に

分けた男性が田の前に座つて俺の履歴書を見ていた。

(すごいやろ)

「K大学ですか・・・どうして前の会社をお辞めになつたんですか？」

七三の男性が柔軟な笑顔を浮かべて聞いてきた。

「ええ、まあ、いろんなことが重なつたんですけど、元もと仕事にやりがいを感じなくて、そこに会社が合併しまして、事实上は吸収されたわけとして・・・」

高木さんへ答えたのと全く同じことを喋つた。

その後二人の男性は交互にいろんなことを聞いてきて、最後に、会社概要を説明してくれた年配のほうの男性が「煙草を吸われるんですね」と聞いた。

「はい」

「禁煙するお考えとかは・・・」

「今のところありません」

「弊社の社屋はすべて禁煙でしてそれをお守りする」とは・・・

「ああ、それは大丈夫です。」

前の会社も全館禁煙でして、どうしても吸いたくなると、会社の前の横断歩道の信号機のたもとに置かれてあつた灰皿まで走つていつてましたから

「そうですか、じゃあ大丈夫ですよね」

「はい」

「それでは、もし今日の結果」縁がありましたら、最後に社長との面接を受けていただきますので、週明けまでにはお返事を差し上げます。今日はどうもご苦労様でした

週明けに、社長との面接に来るよう大輝セミナーから電話があつた。

「なつ、みてみい。

この程度の会社やつたら百発百中なんや、俺の経歴やつたら。

もうこのままこの会社に入ろかな。

また、いちいち面接受けたりすんのん面倒くさいしな

「ううしーよ」

妻は、朝刊と一緒に入っていた求人広告に目を通しながら言った。「そうしよか、と、言いたいといやけど、俺様がこの程度の会社で働くのはプライドがない……。

どうせ組合もないやうだし、有給休暇なんかじるのも一苦労しそうやし、ワンマンな社長に振り回されたりするのが目に見えてるからなあ

「ええやん、ちょっとくらい辛抱したら。

家のローンもあんねんから、もう決めてしもたら

「まあ、その前に、高木さんに電話だけ入れとくわ。

ちょっとはプレッシャー掛けとかんと、なかなか電話貰えそうこないからな

貰った名刺に書かれていた番号に掛けると女性が出てきた。

「どちらの山田様ですか?」「お勤め先はどうなりですか?」「え、無職の方ですか?」

義兄の名前と、辞めた会社名をいつひつと高木さんにつないでもらえた。

「先日はどうもありがとうございました」

「あ、いえいえ」

「その後如何ですか?」

「あ、まだなんですよ」

「そうですか。

いえ、私もちょっと時間が経ちましたんで、ハローワークで一社見つけてきました、週末に最終面接にいくんです

「あ、そうなんですか。

じゃあ、見つかりましたらすぐにつづき連絡いたしますので

高木さんは忙しいのか、逃げるようにして電話を切った。

「高木さんも、俺の経歴に見合つたとこ紹介せなあかん思て苦労し

てはんねやろな

「そりかなあ。

ただ単に、捗してんねんけどほんまに見つかれへんかつたりして

「アホか。

大輝セミナー程度の会社やつたらあつと書ひ間に最終面接までいつてるやないか。

高木さんはな、そんな程度の会社やつたら吐いて捨てるほど知ってるはずや。せやけどこの俺にはそんなとこ紹介でけへん。せめて一部上場の会社は紹介せなあかんいうて苦労してはると思うで。まあ、正式に大輝セミナーで内定貰つてから、今度は直接会つてくるわ。結構時間立ちましたしどうしましょつて

「そんなんにうまくいくかあ？

それに、大輝セミナーかつて、まだどうなるかわからんで。
あんたみたいな態度やつたら落とされるかもしれんで、こいつ生意気や言つて」

「アホか。

もしあの程度の会社落ちたら、もう少し俺も謙虚な気持ちで就職活動に取り組むようにするわ

「ほんまかなあ・・・」

妻の予想はまたしても当たつた。

大竹と言う大輝セミナーの社長は約束の時間に一〇分送れてやつてきた。

「やつぱり大阪は暑いねえ」

大竹はネクタイを緩めながら部屋に入ってきたかと思うと「これうちで取り扱っているんだ」と言つて、ミネラルウォーターの入った小さなペットボトルを俺にトスした。

「ご存じだと思うけど、うちは自然食品の販売もやっていて、この水は本当に良い水なんだ。

人間はやつぱり健康が一番だからね。

健全な体にしか健全な魂は宿らないから」

そう言つた大竹は、長机の向うの椅子に腰を降ろすと書類にじつと目を通した。

「へー、Ｓ高校出てんの？」

「はい」

「あそこは進学校だけど、運動も強いよね？」

「はい。」

「体操だとバレーボールなんかは結構有名ですね」

「で、Ｋ大学か・・・なかなかＫ大学なんかいけないよね・・で、

学部は？」

「経営です」

「勉強は結構やつた方？」

「いえ、あまりしなかつたです」

大竹は首だけを、ああそう、と振ると、しばらく書類に目を落とし何かを考えている様子だった。

「山田さん、自宅はこれ、昔のあの片町線で言つたつけ、あの鷺野と言ひ駅の近くじゃないの？」

「あっ、そうです」

「そうだよね。」

昔、二年だけ、この仕事を興す前に、全然違う畠の仕事の営業やつていて、この辺りに一件お客さんがあつたから良くなろうとしていたんだよ」

「あつ、そなんですか」

大竹は黒のボールペンを口に加えると自分を納得させるかのように何度も頭を縦に振った。

「わかりました」

わかりましたって、五分も喋つていないので俺の一体何がわかつたんだよ、と思っていると、大竹は初めて刺すような目つきを俺に向けた。

「山田さん、煙草吸うんだよね？」

「はい」「

「今すぐやめられる?」

「いえ、今すぐと言わると・・・」

「あつそつ。

「じゃあ、もしやめられたら、また言つてきてくれさー・・・」

3

「どういう意味やと思う?」

あのボケ、訳のわからん」と言いやがつて

俺は、ネクタイを外しながら妻に聞いた。

「さあ・・・・」

妻は、椅子に乗つてクーラーのフィルターを抜きながら首をひねつた。

「良いほんにとつたら、入社後煙草をやめられたら俺に言つてきてくれ。

悪いほんにとつたら、煙草がやめられたらもう一回俺の会社受けに来い、もう言つことちやう?」

「そんなもん差別やんけ」

“大卒以上”いうのと一緒にやんか

「アホか、それとこれとは別じや。

俺は別にかまへんで、こんな程度の会社、半分冷やかしで受けでんから。

せやけど、中にはなんとか受かりたい言つて真剣に受けでる人もおるはずや。そんな人らに対して失礼や。煙草がだめやつたら最初から求人票に“喫煙者不可”て書いとかなあかんよ。

一回ハローワークに言つたろ

「そんなんにムキにならんでええやんか、冷やかしで受けでんやつたら。

「あかん。

間違つたことをやつてる奴にはあんたそれ間違つてるでつて言つ

たらなあかん。それを言わへんから」の国はおかしなつたんや

妻の悪いほうの予想がまたしても当たつた。

面接から三日後、今度は電話ではなく郵送で返事が来た。

“誠に申し訳ないですが、今回の採用は見送らせて……”と書かれた最後に“尚”的続詞に“三ヶ月後、再度ご連絡を取らせていただきます。その時点でお煙草をやめられていた場合、再度社長面接をお受け頂けます”と黒い斜字が印刷されていた。

「何様じやつ！」

封筒までも粉々に千切つて「み箱に放り込むと、「おい、ちょっと飲みに行くから金くれ」と妻に言つた。

「そんなお金無いよ」

妻はつっけんどんに返してきた。

「あほがつ、まだ退職金残つてるやろつ」

「残つてるけど、もう百万円使つてん。

家のローンもあるし、健康保険かつて前よりだいぶ高なつてんねんから。あんた知らんと思つけど

「ちよつとくらいええやんけ。

その退職金かつて、俺が働いてもらつたもんやねんから、一、二、三十万くれたつてええやないか。

煙草買うから三百円くれ、ビール買うから一百円くれ言つておまえの財布から小銭抜いていくのもうなんか情けないんや

「しゃあないやん、あんたが選んだ道やねんから

なにつ、と大声を上げようとしたとき「これだけやで」と言つて

妻は千円札三枚を俺の前に差し出した。

つまらないことで喧嘩をするのは嫌だつたので、三枚の千円札を分捕ると、自転車のキーをGパンのポケットに入れ、家を出た。

“ビンビール（大）三九〇円”に魅かれて入つたガード下の立ち飲みに毛が生えた程度の居酒屋は、夕方の四時を回つたばかりにもか

かわらず、カウンター席を数席残して人で埋めつくされていた。

注文を取りにきた“研修生”と書かれたバッジを胸につけた二十歳くらいの女の子にとりあえずビンビールを頼んだ。

長年酒を飲んでいるが、ラーメン屋に入つてギョウザをあてに一人ビールを飲んだことはあつたが、居酒屋に一人で入るのは生まれて初めてだった。

何か落ち着かない気持ちでメニューを見ていると値段の安さに驚いてしまった。

“冷奴 一五〇円 出し巻き 一〇〇円
まぐろお造り 三〇〇円 ・・・”

ビールを持ってきた女の子に冷奴とまぐろのお造りを注文した。グラスに入れたビールを半分ほど流し込むと少し気分が落ち着いた。

周りを見渡すと、さすがにスーツ姿の人はおらず、みな“作業員”と言う感じの人達だった。

冷奴とまぐろのお造りがやってきた。
どちらとも何の表情もない白い器に入っている。

冷奴はほかの居酒屋で食べてきたものよりは一回り小さく、マグロも四切しか入っていなかつたが、味は決して負けていなかつたし、どちらかと言うと一人で食べるのにはちょうど良い量だつた。

ビンビールが空になると、一合一五〇円の日本酒を冷やで注文した。

三九〇 + 一五〇 + 三〇〇 + 一〇五〇 = 一〇九〇円。

まだ冷や酒を二合飲んで一品頼んでも一千円にいかない。

店を出ると外はまだ明るく、頬が少し火照っていた。

こんな店に自分が入るとは思つていなかつた。

というか、馬鹿にしていた。

こんなところで飲むようになつたら俺も終わりや、と。

財布を覗くと札入れのところに千円札が一枚挟まつていた。

これまでだつたら、営業マンだからと言つて急なつきあいに備えて持たせてもらつていたクレジットカードか会社の「ゴールドカードを持つてキヤバクラへ直行と言つパターんだつたが、今は立場が違つた。

駅前に止めてある自転車を取りに商店街を歩いていると『試写室九八〇円』という看板が見えた。

そつと扉を開けると、入店を知らせる電子チャイムが鳴つた。

「いらっしゃいませ」

声のほうを見ると、カウンターの中で茶髪の若い男性が退屈そうに立つていた。

壁にぎつしりとアダルトのビデオテープが詰まつていた。

「五本まで持ち込めますので」

カウンターの男がぶっきらぼうに言つた。

パッケージの女の視線に耐え切れず、適当に五本のビデオパッケージを、スーパーマーケットのカゴを縦横半分くらいにしたカゴに入れてカウンターに持つていくと、茶髪の若い男性は、パッケージから中身だけを取りだしカゴに入れると「九八〇円前金でお願いします。六十分を過ぎますと三十分」と五〇〇円の延長料金がかかるで」と言つて、テレビのリモコンをカゴに入れ、「二階の五号室になります」と付け加え、そのカゴを俺に差し出した。

急な階段を昇つて二階に上ると、ウナギの寝床のように狭い廊下の両側に扉がぎつしりと並んでいた。

部屋に入り後ろ手でドアの部の鍵を掛けると、リクライニングチエアーに腰を下ろし、テレビとビデオデッキの電源を入れた。

煙草に火をつけると、ビデオテープを早送りする音、ビデオデッキからビデオテープを取り出す音、そして時折、人の呻き声の様なものが聞こえた。

ヘッドホンを耳に被せると、再生ボタンを押した。

裸の女が次から次へと出てきて、男達と交わり、そして、汚されていった。

四本目のビデオを見ているとき、我慢できなくなり、そつとティッシュペーパーを箱から抜き取ると、暖かい精液を湿らした。家意外で自慰をしたのは初めてだった。

何かすごい恥ずかしいことをしたような気になつて、テレビと間仕切りの隙間に置かれてあるウエットティッシュの筒から湿つたティッシュペーパーを引っ張り出すと、手を拭い、ビデオディスクからテープを取りだし、灰皿の縁に置いてあつた吸いかけの煙草をもみ消すと、逃げるようにして部屋を出た。

外は雨だった。

自転車を止めてある駅前まで歩く間、通り過ぎる人の視線を感じた。

濡れたサドルを手で拭きながら跨ぐと、腰が沈むのを感じた。降りて見てみると、後ろのタイヤが自分の顔のよう崩れゆがんでいた。

4

雨の音がセミの泣き声を搔き消し始めた頃妻が起きてきた。

「また寝られへんかったん？」

「おお。

よう寝たくて起きたらまだ四時や。

あとはいつもの通り、朝まで冴えぱっちり寝むれぬ子羊や。」

寝れなくなつていた。

どんなに酒を飲んでも、寝入りはスムーズだが、四時間もすれば目が覚めてしまった。

会社を辞めて疲れなくなつたからかと、陽の高いうちに一時間程度汗をしたたらせながら散歩をしてもふくらはぎの裏の筋肉が張るだけで、何の効果もなかつた。

「軽いうつ病違う？

新聞に載つてたけど、定年退職した人がよくなるものいやで。

高木さんはもうあてにせんと自分でちゃんと探したら？」

妻の言う通り、相変わらず高木さんは何の連絡もなかつた。

「チビ起さんでええんか？」

「今日から夏休み」

会社を辞めたときはまだ寒かつた。

時の流れは止まつてくれない。

嫌なことを洗い流しきれる良いところもあるが、彷徨う人間を置き去りにする残酷な一面も持ちあわせていた。

妻が朝刊を取つて戻つてきた。

景気が良くなりつつあるという記事が一面に載つていた。
辞めた会社の株価は順調に上がつてきている。

妻が苦い口一ヒーを出してくれた。

「ハローーワーク行くんやろ？」

一回目の失業認定日だった。

「うん。

まさか一回も失業保険もらひつとは夢にも思わんかったわ」

地下鉄に乗るのは久しぶりだった。

土曜日でも日曜日でもないのにTシャツにGパン姿にビニール傘を持つている姿が窓に映る。

横目で誰か知つてゐる人が乗つていなか確認する。

誰もいないとわかると少しほつとして吊り広告に目を移す。

“ 転職紹介 一部上場企業多数

(株)ケプトン

お気軽にお申しださい！”

お気軽にと言つが電話番号がどこにも見つからない。

代わりに、ローマ字やらじゅら・・・が横に並んだ暗号のようなものが印されていた。

「どうや？」

すっかり胡麻塩頭になつた父が聞いてきた。

「まあほちほちやわ。

「ちょっとパソコン貸してや」

周りの乗客に気づかれて、ハローワークに向かう途中の地下鉄の中で煙草のケースに書き記した文字を打ち込むと（株）ケプトンのホームページにつながった。

「時代も変わったよな。

履歴書持つて会社訪問する時代なんか終つてもうた

父にお盆に缶ビールと柿ピーをのせてやってきた。

「今は、自分の履歴とかどういった条件を希望するのかをこういった仲介業者に登録しといて、見合つた会社があれば紹介してくれる、そんなふうになつてるんや」

二十分ほど掛けて全てのインプットが終つた。

「パソコンがなかつたら就職もでけへん時代や」

昼間から飲むビールはうまかった。

「おまえもパソコン買えよ。」

父が言った。

「ええよ。

あんなもんな定年退職した無趣味のおっさんが残りの人生の時間潰しに使うおもちゃやがな」と言いかけて、まさに父がそのおっさんには該当するとわかつて口をつけぐんだ。

「なんやつたら買ったろか?」

「ええよ、どうせ使うの今だけやから。

会社決まつたら使うことなんかあらへんから」「

一人で五本の缶ビールを開け「ちょっと寝むたなつたから」と父が居間に消えるともう一度パソコンに向かつた。

電子メールを開けた。

パソコンは嫌いであまり得意ではなかつたが、辞めた会社で、電子メールだけは、上司からの指示やお客様からの注文が入つてきたのでしじょうがなく毎日見るよつにしていたので、使い方はわかっていた。

“送受信”をクリックすると一通のメールが届いているのがわかつた。

父に失礼して開けてみると、（株）ケプトンからだつた。

「ご登録有り難うございます。」

早速ですが一度ご来社の上・・・

お盆の上にこぼれている柿ピーの柿の方を口に放り込んだ。

（株）ケプトンはオフィス街の真中の大きなビルの中にあった。デスクトップ型のパソコンが置かれてある応接室と言つよりはブースと言つたほうがいい部屋で待つていると、電子メールに書かれていた、弓岡、と言つ名前の人、「お待たせいたしました」と言つて入ってきた。

弓岡さんは、歳が三十くらいの女性で、バリバリのキャリアウーマンと言つよりは、婚期を逃しつつある事務職の女性、と言つ感じだつた。

「すばらしいご経歴で」

弓岡さんの第一声だつた。

「どこかほかにご登録されている会社がおありで？」

「いえ、御社が初めてです。」

「そうですか、山田様のご経歴ですと、すぐにお決まりになると思いますので、できれば弊社のほうでご紹介させていただきたいと思いまますので・・・」

「いえいえ、そんな大したことないです、それにもうええ歳ですか
ら」

「そんなことないですよ、まだ三十八歳でしたら大丈夫ですから」
この時、この「大丈夫ですから」と言つ言葉の意味を深く考えなかつた。

「消費財系のメーカー営業をご希望と申します」

「はい」

「まあ、山田様のご経歴ですと、問題はないとは思つんですけど、

ご存じの通り消費財系のメーカーは元もと求人があまり多くはない
ですし、それに関西全体があまり元気がないものですから」

『岡さんは高木さんと全く同じことを言った。

「以前の会社のご経験を活かすと言つことは?」

「まあ、正直、あまりやりがいを感じていなかつたので、できれば
異業種でと考えています」

「そうですか。

ただ、キャリアアップとこうお考へで、以前より更に条件の良い
企業をお探しになると言つことだ・・・

「そうですね、それでしたら・・・」

「では、そちらのほうの登録もしてまいりますのでしばらくお待ち
頂けますか。

良ければこのパソコンで『検索できますので、条件に合つた会社
があるかお調べください』

『岡さんは笑顔を残して部屋を出ていった。
マウスに手を伸ばす。

画面には、確かに一部上場企業の名前がこれ見よがしに並んでい
る。

“掲載企業 1847社”
検索条件をインプットする。

『正社員』『事務・営業職』『大阪府』
『六百万』『大学卒』『三十八歳』

《この条件で検索する》をクリックする。

しばらくすると、“検索結果”が画面に現れた。

『ご希望条件を満たす企業・・・24社!?

何か検索条件のインプットを間違えたのかと思い確認したが何も
間違えてはいなかつた。

24社の中身を見ていくと、ほとんどが、住宅関係の個人営業で、
簡単に言えば、飛び込み営業の完全歩合制、学歴不問、あなたの頑
張り次第で月収百万円以上可、といった、以前ハローワークで見た

内容の会社ばかりだつた。

検索条件から『六百万』を抜いて、もう一度《この条件で検索する》をクリックした。

「希望を満たす企業・・・32社。

増えた8社は、前の24社と同じような会社で、一部上場の“い”的字もなかつた。

とつておきの会社はどこかに隠しているのかなと思つていると『岡さんが戻ってきた。

「お待たせいたしました。

素材メーカーの方も登録してまつりましたので、担当は森中と言うものがさせていただきます」

「わかりました」

「あと、山田様、メールアドレスのインプットが漏れてしまつたので・・・」

「いえ、パソコン持つてないんですね。」

登録は、父のパソコン借りてやつたんで。

まあ、家がすぐ近くなんでいつでも借りに行けますので。」

「そりなんですか」

『岡さんは一瞬人を馬鹿にしたような笑みを漏らした。

「では、ご紹介致したい会社がありました場合は?」

「ファックスでお願いします」

「承知いたしました。

後ですね、『存じかと思いますけど、弊社ではないんですけど、スカウト制と言うものがありますし、『経歴を登録されておきますと、それを見て興味を持たれた企業様からスカウトの声がかかるというものなのです。

山田様でしたらいくらでもお声がかかると思いますので登録だけでもされておいたほうがいいと思われます。まあ、つとしましてはそちらで決められると困るんですけど

そう言つてほほほと笑つた『岡さんの作り笑顔を見て俺は（株）

ケプトンを後にした。

次の日、図書館で本を読んでいると早速（株）ケプトンから電話があつた。

「岡さんではなく、担当と紹介された森中さんからだつた。

「場所は梅田で、従業員数が約五十名。前職の経験が活かせると思つんですけど」

「上場はしないですね？」

「ええ」

「今出先なんで、申し訳ないんですけどファックス入れといてもうれますか」

家に着くと、妻が「なんかファックス来てる」と机の上の紙を指差した。

アルバイト始める

一枚は手書きの書面で森中さんの挨拶と条件に見合つた会社が見つかりましたので、「検討願います」と書いた内容で、もう一枚はその会社の求人票だつた。

従業員五十人、資本金一億円、年商五十億円、年収四百五十万～五百萬、年間休日百五日、組合なし。

「申し込むだけ申し込んでいたら」

「うーん、この程度の会社じゃなあ・・・」

「やっぱりその程度の会社しかないんやで」

「アホか。

もう一人の担当の人は俺くらいの経歴やつたらなんぼでもええと
こあるわって言うてたわ

「お世辞やんか。

向こうからしたらあんたは一応お客様さんやねんから。

お客様に向かって、あんたこれやつたらどこも決まりませんわ
つて言わへんやろ。」

次の日、また森中さんからファックスが来た。

辞めた会社で昔担当していた、町の小さな問屋だった。

「ええん違うの。

社員の人も知ってる人ばかりやし、どんな仕事してんのかもわ
かつてんねんから

「下手に知ってるから嫌やねん。

まあ、社長で迎えてくれるんやつたら考えてもええけどな

森中さんに断わりの返事を入れようかどうか迷つたが、向こうか
ら何か言ってくるまで待とうと思い、辞めた。

結局、この日以降、?ケプトンからは一切連絡が来なくなつた。

「なんかメールが来てるぞ」

父の電話に、ちょうど昼御飯の時間で一人で行くのがバツが悪かつたので娘を自転車に乗せ、実家に飛んで行った。

「なんか、スカウトがきました、て書いてあるで」

あわててパソコンの電源を入れ電子メールを開いた。

「あなた様のご経歴を拝読し・・・」

外資系の損害保険会社からだつた。

「何や、保険の勧誘員か。」

何が、五百人の中から三十人だけに声を掛けさせてもらいましたや、片つ端から声を掛けてるくせに」

「そんな贅沢ばっかりもつ言つてられへんやろ」

娘に目を細めながら、父が、声だけを掛けてきた。

「これだけはあかんわ。」

俺の同期も何年か前に会社を辞めて、同じ様な会社に入つたけど、結局は、同期の俺らに保険入つてくれ言つて頭下げて回つてたからな。

あんなカツ「悪いことだけはしたくないわ。

あんなんするんやつたら、家族みんなで飢え死にしたほつがまし

や

「こんなかわいい子、飢え死にさせるんか」

父は娘の頭を撫でながら部屋から出でていき、代わりに母が入つてきた。

「なかなかうまくいかへんのん?」

「うん。」

ひょっとしたら、もう、歳かもしれへんなあ

「せやけど、あんた、K大学出て、あつちこつちいろいろんな会社辞めたんとちやう、一つの会社でずっと働いてきて、何も悪いことして辞めたわけやない、自分からいろいろ考えて辞めたんやから大丈夫なんぢやうの?」

「俺もそう考えとつたんや。

せやけど、世間はどうもそりやないみたいやわ」

俺は会社を辞めて初めて、弱音を吐いた。

「そら雇うほうから考えてみたら、同じ一から教えるんやつたら、まだ頭の柔らかい、人件費の少しでも安い人間雇うわな。

自分では、三十八言つたらまだまだ若い思てたけど、新たに就職しようと思つたら、もうリミットを超えてるかもしけんわ」

この、母に言つた言葉が、やがて、現実であることを思い知らされることになつた。

人材派遣業では日本のトップクラスを誇り、毎年行なわれるマラソン大会のメインスポンサーを務め、選手のゼッケンの上に社名を大きく刻むその一部上場の会社は、梅田のど真中の高層ビルの中にあつた。

Hレベーターを降り、受付へ行くと、会社を辞めて半年足らずで7kgも太つてぴちぴちになつたスーツの上着のボタンが、胸の高なりで弾け飛びそうなくらい綺麗な受付嬢が「お待ちしております」と言って、小さく区切られたブースに通してくれた。

すぐに古田と言つ、三十歳前後の男性がやってきて、丸いテープルを挟んだ向かいに腰を下ろした。

名刺には“キヤリアアドバイザー”と書かれていた。

「山田さん、退職されたのが二月の末で、半年が経過しておりますが、どのような就職活動を行なつてこられましたか?」

「ええ、実は、まあ、口ネ言つたらおかしいんですけど、ある方に紹介をお願いをしておつたんですけど、どうも当初思つていた通りに話が進まなくてですね、二カ月前くらいから自分で動くようになつたんです」

「これまで何社ほどお受けになりましたか?」

「一社です」

「一社?」

「はい」

「それは何でお調べになつて？」

「ハロー ワークです。」

「良ければ、どちらで？」

「大輝セミナー 言つ、弁護士だとか会計士を目指す人が通う予備校みたいなところですわ」

「存じています。」

「そちらは営業で？」

「はい。」

最終面接までいつたんですけど、煙草吸うから言つて落とされました。訳のわからん会社ですわ」

古田は俺の言うことを無視して続けた。

「今お受けになつている会社は？」

「ないです」

「そうですか」と言つて、古田は腕を組み、手元の資料を見ながらうんうんと首を振つた。

「山田さん、こんなことを言つては何なんですけど、お考えを変えたいだから、少し厳しいかも知れませんね」

古田の言う意味が良く分からなかつた。

「山田さん、転職を希望している二十代の男性が内定をもらつままでに受ける会社の平均数をご存じですか？」

「（そんなもん知るか）いえ」

「十四社なんです。」

それにこいつっては何ですけど、山田さんは、今、三十八歳ですよね。」

「（それがどしてん？）ええ」

「全ての求人のうち95%が、三十五歳以下の方を対象としているんです。と言つことは、残りの5%から山田さんは仕事を見つけなければいけないんです。」

「（おまえ、俺の経歴書見たんか？ その辺の失業者とは訳が違うやぞ）ううなんですか？」

「ですから、言葉は悪いんですけど、下手な鉄砲じゃないんですけど、どんどん応募していかないと・・・途中で気に入らないのなら断つてもいいんですよ、直接に行つて話を聞くだけでも何かの足しになると思いますので、とにかくたくさん応募するようにしてください。ちょっと、ご条件に見合つた会社を検索してきますのでしばらくお待ちください」

言い残すと、古田は慌てるようにして去つていった。

「味噌もクソもいつしょにするなよ。

俺は、その辺で物乞うするようにして会社探してゐる人間とは訳が違んや」

吐き捨てるように一人ごち、全面ガラス張りの向こうに見えるスマッグで煙る大阪の街並を見下ろした。

「一度見てください」

息を切らして戻つてきた古田は紙の束を俺に渡した。

「なかなか消費財系のメーカー営業と言つのは求人自体少ないんですよ。あまり固執しないで、『営業』と言つ括りでお探しになつたほうがいいと思ひます」

さすがに、飛び込み営業の歩合制の仕事や保険の勧誘員といったものはなかつたが、おつ、と田を見張るようなものもなかつた。

「如何ですか？」

「うーん、まあ、一回帰つてからよう検討しますわ」

「お受けにならうと思ひ会社がありましたらご連絡ください。お待ちしておりますので」

「古田さん」

俺は古田に声をかけた。

「はい？」

急に声を掛けられて、古田は少し驚いた表情をした。

「古田さんのお仕事ありますよね、このキャリアアドバイザーリングの、じつははどうですかね？」

実際に、パソコンを使った会社検索で、よくこういった人材派遣業を目にした。大卒以上、四十歳くらいまで、未経験者歓迎と言った文字が踊っていた。

「営業経験が長いですから、いつもやつて初対面の人間と話すのも苦ではないですし、実際に転職を経験しているわけですから、その人の気持ちになつて話ができると思うんですよ」

「うんー、難しいと思うんですけどねえ」

「（おまえ、嘘でもええから、いいんじゃないですかと言えんのか）条件も合つてると思うんですけどね」

「退職してからの期間が長引けば長引くほど条件が悪くなりますから、まあ、どうしてもとおっしゃるんだったら一度お受けになられてもいいかと・・・」

「（何やその言い方はっ！ 受けても通らんて言うんか？ おまえよりもっと俺ははきはきと明るく喋れるし、相談に来た人に希望を持たせて帰らせてあげれるぞ。よしそ、内定取つておまえの鼻明かしたるやないか。どうせつまらん私立の大学出て、面接で心にも思てないこと言うて媚び詔つてなんとかこの会社に潜り込んだんやろが。おまえとレベルの違うとこ見せつけたろっ！）わかりました、色々と有り難うございました」

席を立つと頭も下げずにブースを出、受付嬢の顔をもう一度だけ覗くと、エレベーターに乗つてビルを下りた。

翌日、朝から実家へ行きパソコンの前にかじりついて、全部で七社の人材派遣会社に応募した。

中には、資本金一千万、年商十億、従業員数十二名と言つ会社があつて、何でこの俺がこんな会社を、と思ったが古田の鼻をとにかく明かしたかったので、迷つた挙げ句“応募する”をクリックした。

ところが、七社全ての会社が不採用となつた。

それも全でが面接にも進めず、書類選考で落ちたものだった。

もちろんその中には、資本金一千万、年商十億、従業員数十二名

の会社も含まれていた。

あとでわかつたことが、未経験者歓迎というのは、二十代の若い未経験者、を言つのであって、四十歳くらいまで、と言つのは、経験のある四十歳、のことを言つのであった。

「やつぱりプロの人があることは正しいやんか。

言つ通り、業種は選ばんと、下手な鉄砲数撃つたら

妻が野菜炒めの入った皿をテーブルに置きながら言つた。

6

娘の夏休みも終わり、残暑の厳しさがやつと過ぎ去りかけた九月の終わりになつても、俺は家でぶらぶらしていた。

就職活動は、雇用保険を貰うためにハローワークでのパソコンを使つた求人検索に一回行つただけで、それ以外は何もしていなかつた。

何かしなければいけないとと思うのだが、どこかで、傷つけられたプライドが更に傷つけられるのを恐がつてゐるのか、どうしても腰が重くなつた。

朝刊を読みながらいつもの苦い「コーヒー」を飲んでいると妻が出かける準備をし始めた。

「どこ行くねん？」

「ハローワーク」

手鏡を手に、目をパチクリさせながら妻が言つた。

「ハローワーク？」

何しに行くねん？」

「パート探しに行くねん。

前から働きたいと思つててんけど、いい機会やから。」

「なんや、嫌みか？」

「半分な」

「チビは大丈夫なんか？」

「午前中だけのやつ搜してくるから」

「そりゃ」

「ちょっと、帰りに買い物行ってくるから両御飯は勝手に食べといてな。カップラーメンやつたら台所の棚の一番下にいっぱい入ってるから」

「おう・・・すまんのう」

カップラーメンを食べながら毎のワイヤーショーを見る。

月曜から金曜までの田替わりで出てくるレギュラー人のタレントの名前を全部覚えてしまった。

さつきまで見ていた、アメリカ大リーグの松井が所属するヤンキースの打順もすべて覚えてしまった。

一ヶ月はあつと言う間に過ぎていくが、一日は長かった。
妻が晩酌用に買った缶ビールを冷蔵庫から取つてくるとフルトップを開けた。

外で飲む機会がめっきり減つた、と言つか、ガード下の安酒を飲む以外はゼロだった。

財布の中には小銭しか入つていない。

妻に小遣をくれとはもう言えなかつた。

貯金の残高を言われるのがオチだつた。

テーブルの上に置いてある朝刊のテレビ欄の下に、消費者金融の広告が載つている。

最近市民権を得た“グラビア”と言つ職業の女の子の口から吹き出しが出で、その中に、お気軽に相談ください、といった文字が納まつてゐる。

「頼むからサラ金だけは行かんといでな。

お金なくなつたら言つんやで」

会社を辞めてから、母は俺の顔を見る度に言つた。

駅前に自転車を止めると、店の前を三回往復した。

トレーナーの下のシャツに汗が滲んでいるのがわかる。

通りを歩いている人の視線全てを感じた。

四回目に前を通ったとき、風に吹かれるよつにして店に入った。

“自動契約コーナー”と書かれた扉を押す。

液晶画面の指示に従い、画面横のスキヤナーの上に免許証を置きカバーを下ろすとまぶしい光を発して俺のデータを読み取った。

“備え付けの用紙に必要事項をご記入の上、液晶画面の上に裏向きにお置きください”

液晶画面が喋る。

途中、職業を記入する欄があつたが、自営業、と記入し、社名は（有）ヤマダ、電話番号は自宅と同じ数字を、月収は三十万と記入した。

液晶画面に用紙を置く。

スキヤナーがゆっくりと下りてきて用紙をなぞつた。
しばらくすると壁に備え付けてある電話が鳴つた。

「ご利用有り難うございます。

何点かご質問したい点がござりますが、お時間のほうは大丈夫でしょうか？」

「大丈夫です」

「ありがとうございます。

早速ですが、山田様、本籍地はどうなりますでしょうか？」

「大阪です」

「ありがとうございます。

で、ご住所は、いかがなマンションドよりしへんでしょうか？」

「そうです

「ありがとうございます。

分譲でしょうか、それとも賃貸でしょうか？」

「分譲です」

「ありがとうございます。

お差し支えなければ月々の返済額をお教え頂けないでしょうか？」

「毎月だいたい八万円くらい。ボーナスで約三十万返します」「ありがとうございます。

あと、お仕事のほうなんですが、自営業とのことですが、簡単「どのように」商売をされているのか教えていただけますか?」

「樹脂関係の一次流通って言つか、ブローカーって言つか、町の問屋さんとか小さい商社さんと、最終のコーナーさんとの間に入って利ザヤを稼ぐ、まあ、伝票だけの商売で、物も造りませんし、もちろん在庫も持つていません。

今年の三月に十四年間勤めていた会社を同僚と一緒に退職して始めた商売なんですけど、まだまだ軌道に乗らなくて生活費がちょっと足りないもんで・・・

「ありがとうございます。

なお、今後、毎月のご利用残高ですか色々なお知らせのDMを「ご自宅に送らせて頂きたいと思つてるのでですが?」

「いえ、それは結構です」

「承知いたしました。

もし緊急な用件がありました場合、「連絡はいかせて頂いてよろしいでしょうか?」

「いえ、携帯のほうにお願いします」

「かしこまりました。

それと、大変不躾な質問なんですが、「近所にお身内の方はお住まいでしょうか? 決して確認を取るようなことは致しませんので」

「父親が住んでいます」

「お名前を頂戴頂けますでしょうか?」

「宏です」

「ありがとうございます。

それでは、最後になりますが、山田様、「本人の確認をさせていただきます。

干支と星座は何になりますでしょうか?」

「羊年のお羊座です」

「コンビニのCD機は、いつも簡単に一万円札十枚を吐き出した。自己破産者が年々増えていくのも無理はないなと思いながら、借りた金なのに何か得したような気分になつて、コンビニの向かいのパチンコ屋へ意気揚々として入つていった。

一時間で三枚の一万円札が無くなつた。

店の前から辞めた会社の元部下の携帯に電話を入れる。

「ああ、どうもご無沙汰します。

お元気ですか？」

電話でそう言つた元部下は、待ち合わせの場所で顔を見るなり「太りましたねえ」と第一声を上げた。

競馬で万馬券を当てたと嘘を言つて、寿司屋に入り、カウンターで腹いっぱい飲み食いした後、久しづぶりにキヤバクラへ行つた。

トレーナーにGパン姿の俺と、スーツ姿の元部下の組み合わせに、横に座る女の子が変わる度に「どういう関係なんですか・・・」と聞かれ、いちいち説明するのに疲れたが、一時間たつぱりと楽しみ、勘定を全て持つた。

恐縮がる元部下に「おまえ達が働いてくれてるから俺が雇用保険をもらえるんだっ」と通りを歩く人の注目を浴びるほど大きな声で叫び、前を通りがかつたタクシーを止めると「無理言つて悪かったな」と一万円札を握らせ、車を走らせた。

財布を開けると一万円札はなく、五千円札と千円札が仲良く肩を寄せあつていた。

結局、最後の失業認定日の十月の一週目の月曜日までに消費者金融からの借り入れは三十万を超えた。

急に羽振りの良くなつた俺を妻はまったく疑わず、一度聞かれたときは、辞めた会社の労組の積立金が満期になつて返ってきたんだと嘘をついた。

「今日多分残業やと思うからあの子帰つてくるまで家におつたつて

な。

月曜日で四時間授業やから一時まで」は帰つてくるから「ハローワークの帰りにパチンコに行ひと田論んでいた俺は、「えつ」と意外そうな声を出した。

「それくらいええやんか」

珍しく不機嫌そうに言つた妻の髪の生え際に白髪が田立ち始めていた。

「退職金ももうあんまり残つてないで。ボーナス用のローンも待つてんねんから、そろそろ本腰入れて仕事探すか、アルバイトにでもいつてや」

それだけ言つと妻は忙しそうに出ていった。

「」の間よつせん申し込んでたんはどうなったんや」「散歩に出かける父が、玄関から声だけを掛けてきた。

「あかん。

全部アウトや。

それも、書類選考で全部はねられた。」

「そうか。

まあ、はよ決めて奥さん安心さしたりや」「

父が出ていくと、母がずっと待つていたかのよひにやつてきた。

「うまいいかへんのん?」

「うん。

なかなか俺が必要としてくれるところがないわ。

まあ、それはそれで別にかまへんねんけどな

「ほら」

母が手で、マウスを握つていい俺の右腕の肘を突いた。

「お父さんには内緒やで」

母親の左手には封筒が握られていた。

「そんなんええで、まだ金もあるし」

「かまへんから、はよなおしどき。」

「サラ金なんか行つてへんやろなあ？」

「大丈夫やつて」

検索された二十社の中から、本社が福井県にあるカニ加工品販売会社、三年前に一度倒産し、外資系の銀行に助けてもらつて復活したスポーツ用具メーカー、テレビでコマーシャルをよく見かける介護業界で日本NO.1の会社、一部上場のベアリングメーカーの100%出資子会社、大手スーパー専門の食品品質管理会社、メーカーの現業部門にブラジル人を派遣する派遣会社、飛び込み営業はまったくないどうたつた会員制のリフォーム会社、に応募した。

家に戻ると、妻がしかめつ面をしながら肩に湿布を貼つていた。

「おう、じき苦労さん。

どしたんや、肩こつたんか？」

「一日中パソコンの前に座つてデータ入力してたから、もひ痛くて痛くて。

あの子は？」

「友達のどこへ遊びに行つたよ」

「あなたは？」

「パチンコ打ちに行つてたんや、つて嘘や。

あんたが働いてくれてんのにそんなことしてたら罰当たるわ。

同じ“うつ”でも、下手な鉄砲撃ちに行つてたんや。」

妻は、はあ！？、と言つ顔をした。

「おやじんとこ行つてパソコン叩いてきたんや。

営業と言う名の付くやつに全部応募してきたわ。

これであかんかったら、ほんまタクの運ちゃんでもするわ。K大学出のタクシー運転手言うてドキュメンタリーで二つかのテレビ局が追つかけてくれるかもしれんわ」

「あんたには無理やわ。

色んな客がおんねんで。

特に夜になつたらほとんどが酔っ払いやで。そんな人らになんか文句でも言われたら、あんたのことやから“この俺様に向かつて何を吐かしてゐんや”言ひつけすぐに喧嘩するに決まつてゐんか

「アホか。

こいつ見えても俺は結構サービス業に向いてんねんぞ。

愛想もええし、第一お客さんに向かつて「ありがとうございます」といひだしまし「て言つのが好きやから。学生の時でも、時給のええ塾の先生や家庭教師のアルバイトなんか大学やからこくらでもあつてんけど、あえてサービス業のバイトばっかりやってんから」

「アルバイトと正社員はまた違つて。

それより、もししつまくこつて、その申し込んだ会社に内定もらつとなつたらどれくらいかかるのん?」

「そり、書類選考に一週間から二週間、一次面接があつて最終面接があつてなんやかんやで一ヶ月くらこはかかるやうな

「その間何すんのん?」

「そやな、昼まで寝て、起きたらパチンコ行つて、勝つたらそのまま飲みに行つて、負けたら家でヤケ酒飲んで・・・

「アホか、何言ひてんのん!」

「冗談やつて。

そんなんムキんなるなよ。

ちゃんとアルバイトにこども行ひうと思へんねんけど、どんなとこ行こかなと思つてな。

この歳になつて、肉体労働はもう無理やし、会社の内定が取れるまでの間だけ働かせてください、内定取れたらすぐに辞めますので、ていうワガママ聞いてくれるとこなんかないやい

「短期のやつ行つたらええねん。

一日だけとか一週間だけとかつてこいつのがあるから

「そんな都合のいいやつあるか?」

「ちょっと私の鞄取つて」

確か三年くらい前の誕生日に買つてやつたかなり疲れた一応プラ

ンド品の手提げ鞄を渡すと、妻は中から筒のよつに丸めた薄い冊子を取りだし俺に渡した。

「その中にいっぱい載ってるわ。

“短期”のページ開けてみい

言われた通りそのページを開けてみると『短期歓迎、一日から可』と言つ言葉がたくさん踊つていた。

今は昔みたいに働く所に直接申し込むんやないねん。

仕事を紹介してくれる派遣業者にいつたん登録して、そこから色々な仕事を紹介してもらつねん』

「正社員になるのもアルバイト見つけんのもシステムは同じやねんなあ」

「業者は紹介した会社から紹介料を貰えるし、働く人らも一回働いてみてイヤやつたらまた別の仕事紹介してもらえるし、良かつたらそのまま続けたええし、ビツカヒにとつても利点があるんよ」

「世の中変わつてんなあ。

それより、なんでおまえそんなん持つてんねん」

「スーパーの前に置いてあつたん取つてきてん」

「ただなんか?」

「そうやで」

「えつ！？」

俺ら学生の時確か百円したはずやで。よう買うたがな」

「スーパーの前とか、自動販売機の横とかに置いてあんねん。百円取つて本屋にしか置かれへんより、ただにして色んな人の集まる所に置かしてもらつたほうがいいんぢやうの」

「そうか・・・で、おまえ、まだ別のどこで働くんか？ あんまり無理すんなよ

「違うよ。

今のところもええねんけど、パソコンも私らん時よりようなつてんのか知らんけど、データ入力する前に操作で覚えなあかんことが多くてな。

もうちょっと単純な、お弁当の盛り付けとかみたいな仕事探そう
と思って」

「そりなんか。

やっぱり、俺ら、もう歳なんやで」

その事務所は、天王寺駅から歩いて十分ほどの雑居ビルの中にあつた。

化粧つ氣のない二十歳くらいの国公立大学生風の女の子が一人、男は、二人のうち一人は学生でもないが社会人でもないフリーター風と、もう一人は、自分より少し若い、コンビニの店長といった感じの男、の四人が説明会に来ていた。

五人は、仕事の予約から給料を受け取るまでの一連の流れを分かり易く説明したビデオを見せられた後、登録書を渡され、早く書けたものからカウンターで待っているまだ二十歳になつてないんじやないのかと思われる髪の茶色い女の子のところへ行つた。

「今のビデオで何かご質問はございませんか？」

仕事は、働きたい日の一日前に電話で予約を入れる。一回で一週間分の予約を入れることができる。

ところが、ここからが面倒臭く、仕事の前日に、間違いなく明日行きますと確認の“前日コール”を入れ、仕事の当日、朝、家を出る前に“出発コール”集合場所に着くと“到着コール”そして仕事が終わると“終了コール”を入れなければいけない。

携帯電話から事務所の電話に掛けるので電話代も馬鹿にならず、おまけに、勤務地までの交通費が日給七千二百円の中に含まれていて、更に、日払いを希望する場合は、給与は勤務地で貰えず、わざわざ交通費をかけ天王寺のこの事務所まで取りに来なければいけないどころか、一勤務につき“データ処理手数料”と称して二百円取られてしまう。

時給九百円があつと言つまに八百円になつてしまつ。

こんなこと一言も求人雑誌に書いてなかつたやないか、と文句を

言おつと思つたが、いい歳をしてこんなところへ来ていやいやれを起し、更に慘めな気持ちになりたくなかつたので、やめた。

「とくにないです」

「それでは、先にスタッフカードをお渡ししておきます」

入つてきたときに真つ先に渡した免許証用の証明写真を貼り付けた、レンタルビデオ屋のメンバーズカードのようなものを渡された。

「今お仕事は？」

「今年の一月に十四年勤めた会社を辞めまして、今就職活動中です。次の会社が決まるまでの間の繋ぎ言つたら怒られるんですけど…。」

・

「いえいえ、では、ほかにアルバイトかなにかは？」

「やつてないです」

「わかりました。

では、短期といつことによろしいですね？」

「はい」

「なにかご希望の仕事とかはありますか？」

「まあ、この歳なんで、あんまりハードな仕事は無理やと思つんで」

「そうですか、ではこいつたのはどうですか？」

“到着ホール”を掛け終え、地上に出ると、一目でこれから同じところに働く奴らだとわかる輩達が、会社へ向かうスースツ姿の人たちから、おまえら何の団体や?と言つて見られながら屯していた。しばらく、辞めた会社の得意先が近くにあったので、知つた人がいないか辺りを警戒していると、自転車に乗つた、耳にピアスをしてキヤップを斜めに被りずり落ちたジーンズから下着を覗かせている若い男の子がやってきて「こっちです」と小さな声を出し、みんなでだらだらとその後を付いていった。

「一つ目の信号」を渡り左に折れると、その製本会社の建屋が姿を現した。

「本の検品とラベル貼りですから、そうきつこ仕事ではないと思つ

んですけど」

天王寺の事務所の女の子が言つた言葉を思い出しながら、派遣されてきた会社ごとに置かれた用紙に名前を書くと、いつたんその建屋から出、向かいにある一回りは大きい建屋に入つていつた。

五階にある更衣室まで階段で上り、少し息を切らせたまま薄い綿のジャンパーだけを脱いで、また階段で三階まで下りた。

“現場の主”といった六十くらいの鬼オコゼの様な顔をしたおやじが、回りを陣取つた俺達をぐるりと見回し、一番恰幅のいい男の子を指差すと「おい、おまえこっちこい」とえらそうに言つてどこかへ連れていつた。

「じゃあ、あんたらはこっち来て」

おそらくは鬼オコゼの子分であるう三十くらいの、丸坊主頭に片方の耳にだけピアスをした男が俺達を手招きした。

木製のパレットの上に山と積まれた高校受験のための参考書の束をほどき、赤のカバーと青のカバーとのものに分ける作業だつた。

一束は、B4の大きさで厚さ一センチくらいの参考書二十冊で構成されていた。

少し重かつたが、目の前の木製の机に降ろすと、PPバンドを力ツターナイフで切つて束をほどき、赤のカバーと青のカバーのものに分けて積んでいくだけの作業だつた。

はつ、と壁に掛けてある時計を見ると、作業開始から一時間が経過していた。

これならなんとかやつていけるな、両肘に筋肉の張りを感じながらも俺はそう思った。

昼休みになり、片道十分をかけてコンビニでお握りとお茶を買い戻つてくる途中、ズボンのポケットにいた携帯電話が震えた。液晶の画面に映つた番号は天王寺の事務所からだつた。

「山田さんですか？」

「はい」

「お仕事大丈夫ですか？」

「あつ、ありがとうござります。

なんとかやれていますんで。」

「そうですか。

「じゃあ、またお昼から頑張ってください」「電話を切ろうとした女の子を俺は止めた。

「明日まで予約入れてあるんですけど、あと木曜と金曜も入れても
られます?」

「わかりました。

予約状況を見ますのでしばらくお待ちいただけますか」「しばらくして、大丈夫です、と言つ女の子の声を聞いて、急ぎ足

で俺は元来た道を戻った。

ところが、慌てて食べたおりぎりの塩味を舌の上に残しながら職場へ戻ると、とんでもないことが待ち受けていた。

鬼才コゼが俺に声を掛けってきた。

「ちょっとこっち来い」

誰にえらそうと言つとこじや。

思つてこると、Hレベーターに乗せられ、一階で降りた。

「流れてくるやつを一つ重ねてもうつて、正面に“理科”って言つ文字が来るようにしてください。あと、端をきれいに合わせてください。梱包の時にずれたりしますので」

鬼才コゼから後を継いだ人の良さそうな三十くらいのお兄ちゃんが丁寧に説明してくれた。

ラインの前に立つてみる。

五年生の理科の教科書の束が流れてきた。

掴む。

重くない。
束を重ねる。

“科理”!?

慌てて乗せたほうの束を掴もつとしたが、指がうまく間に入らず教科書の山を崩してしまった。

「そんなんあせらんでいいですよ」

もう一度、止めたラインを動かしてもいい。

今度は“理科”が正面に来た。

五回に一回“科理”になつたが、だんだんと慣れていった。三十分もすると鼻歌が出るようになつた。

しかし、理科の教科書は次から次へと流れてきた。おまけに朝から立ちっぱなしで、ふくらはぎの裏が激しく張つてきた。

慣れないときは時間の立つのが早かつたが、慣れてくると、何回壁に掛けてある大きな時計を見ても、時計の針はほとんど動いていなかつた。

そして、五時の終業のチャイムが鳴つたとき、五分のトイレ休憩を一回はさんだだけですつと同じ位置に立つたままの両足と、日本中の五年生の理科の教科書の束を掴んだのではないかといつ腕と言うよりは十本の指は硬直して動かなかつた。

フランケンシュタインのようにして五階の更衣室まで上ると、朝一緒に来た連中は、ずっと同じところにいたのか、俺のようटビリシのラインに立たされていたのか知らないが、みんな何事もなかつたかのようにけろりとした顔をしていた。

翌日、事態は更に悪化した。

昨日一番最初にやつていた、高校受験のための参考書の束を解いて赤いカバーと青いカバーに分ける作業をしてみると鬼才「コゼガ声を掛けってきた。

「おまえ、四階に上がれ」

四階でエレベーターを降りると、日の輝きを失つた小柄な三十歳くらいの男が手招きした。

「どんどん流れてくるんで後ろのパレットに積んでいつて」

本は、家でよく妻がお菓子を食べながら読んでいる、厚さ5セン

チはある通販のカタログで、一束はそれが5冊で構成されていた。

元もと手の小さい俺は、束を掴むだけでも一苦労だらう。

それをラインから降ろし、後ろのパレットに積んでいかなければ

いけない。

握力はすでにゼロに等しかつた。

更に悪いことは、ただパレットに積んでいけばいいのではなく、
フォークリフトで運ぶときに荷崩れを起こさないようバランスよく
積むため、一段ごとに束の向きが違い、それを覚えなければいけな
い。

ラインが流れ出す。

束をなんとか掴む。

パレットに下ろす。

束がやつてくる。

掴む。

下ろす。

束。

掴む、下ろす。

束。

掴む、下ろす。

束。

掴む、下ろす。

束。

手に力が入らない。

「こりつ、早よせんかいつ！」

束。

掴む、下ろす。

束。

掴む、下ろす。

束。

「おいつ、方向が違つやろつー。」

束。

掴む、下ろす。

束。
掴む、下ろす。

「こらっ！」

おまえまた方向が違つやないかっ！
もう限界だつた。

束。
掴む、下ろす。

束。
掴む、下ろす。

束。
掴む、下ろす。

束。
掴む、下ろす。

ラインが止まつた。

「あんたもうええわ。

三階に降りといで

徘徊する認知症の老人のように俺はエレベーターに向かつ。
後ろで男達の声がする。

「使いもんにならんのう」

失意の中で

三階に降りると、鬼才「ゼガ哀れみの田で俺を見る。

「続きやつといて」

堆く積まれた赤いカバーと青いカバーの参考書の周りには誰もいなかつた。

妻に造つてもらつたアルミホイルに包んであるおにぎりを震える指でなんとか食べ終えると、建屋を出て携帯電話を握つた。

「あつ、山田さんですか？」

天王寺の事務所の女の子が俺の声を聞いて明るい声で答える。

「申し訳ないけど、急に面接が入つてしまつたんで、昨日せつかく取つていただいた明日と明後日の仕事キャンセルしていただけます？」

「そうなんですか・・残念ですね。

わかりました。

但し、山田さん、前日のキャンセルは本来はお受けできないんですけど、今回は初めてだとこう」とでお受けしますが、今後は「注意ください」

「（もう一度と電話なんかする」とないと黙つた）わかりました。無理言つて申し訳ないです」

「お皿からも頑張つてください」

「ありがとうございます」

この子の声ももう一度と聞くことはないんやうなと思い、電話を切つた。

「どうやつたん？」

「あかん。

もう体が動かんわ。

やつぱり俺はスーツを着て働く人間や

「明日はどうすんのん?」

「行かへん。

もうキャンセルしてきた。

なんか別の人また探すわ。」

「別のんて、短期いうたらこんな日雇いみたいのしかないよ。

明日また派遣会社に電話して、体がきつかったからもう少し楽な
やつないですかつて聞いてみいな」

「アホか。

そんなん言うたら、明日と明後日のやつキャンセルしたのん、体
がきつかつたからって嘘ついたんばれるやんけ」

「そんな見栄張つてる場合ぢやうやんか。

あと銀行の残高どれだけあるか見したるか

「そう怒んなよ。

わかつたから、とりあえず今日は早よ風呂入つて寝かせてくれ。

あとはまた明日からちゃんと考えるから

「ほんまに考えんのかいな」

「ほんまやつて。

それより、入浴剤あるかな。よつテレビでやつてるやんか、たま
つた疲れが取れるつてやつ

「そんなんないよ。

第一、人との温度差のわからん人間に入浴剤の効用なんかわかる
わけないわ」

駅の階段を上る太股とふくらはぎの張りはかなりましになつた。

しかし、十本の手の指の張りはまだしつこく残り、切符を買うとき財布の中から小銭を取り出すのに苦労した。

受付で名前を告げると「そちらでお待ちください」とソファーを

指差された。

グループで申し込みに来たのか二十歳くらいの女の子達がきやつ
きやつときやつと言つて楽しそうに話していた。

喫煙室と書かれた紙が貼つてある部屋を見つけたので胸のポケット
に手を突つ込んだとき、「六十一歳ですけど大丈夫ですか?」と男
性の声がした。

Gパンにジャンパー姿の俺と違い、きれいに折り目の付いたスラ
ックスにブレザーを着た小綺麗な男性だった。

説明会の会場に入る。

スーツにネクタイ姿の男性が何人かいる。

景気が良くなつてきたと言つているがほんまなんかなと思ひながら
説明を聞く。

時給七百五十円、夜勤でも千円には満たない。

「せやけど、あんたにはちょうどええで。

葉書とか封筒くらいやつたらか弱いあんたでも持てるやろ。

それに、期間も一ヶ月やし、夜勤やから、昼間に面接とか入つて
も大丈夫やんか」

妻はそう言つておれにこの仕事を勧めた。

説明会が終わると、簡単な面接が行なわれた。

履歴書も職務経歴書もない。

「山田さんは今何かお仕事を?」

スーツの下にチヨツキを着たいかにも公務員といった感じの俺と
同じ年くらいの男の人が聞いてきた。

「いえ、一月に会社を辞めまして、今、就職活動中です」

「そうですか。

今回は郵便物の仕分けで応募頂いたんですけど、車での集配業
務は如何ですかね?」

「いえ、あんまり車の運転が好きでないんで」

「そうですか、わかりました。

もし、お知り合いでどなたかご紹介頂ける方がいらっしゃいまし
たら是非お願いたします」

チョッキは申し訳なそうな顔をして頭を搔いた。

「あと、以前にアルバイトか何かでこちらでお勤めになられたこと
は？」

「ええ、もう二十年くらい前ですけど、家の近くの郵便局で一度や
つたことがあります」

「そうですか。

じゃあ、大体どういったものかといつのばい存じですかね？」

「もうだいぶ前ですからね」

「いちおう、採用の前に、四時間くらいの実地訓練を行ないますの
で、平日の午後とかは大丈夫ですか？」

「大丈夫です」

「配属される部署によつては十キロくらいの荷物を積み降ろしして
いただくことがあるんですけど」

手に通販カタログの重みが蘇った。

「もう歳なんですね、できたら避けていただきたいですね」

「わかりました。

それと、夜勤ですので、週に三日程度の勤務になると思つんですね
けど、場合によつては残業をお願いしたり、誰かが休んだ代わりに
急きよお休みのところを出ていただくことをお願いすることがある
かと思うんですけどそれは？」

「大丈夫です。

出来るだけ対応できるようになります」

「ありがとうございます。」

おそらく、年末が近づくと何度か無理をお願いするケースが出て
くると思いますので。

それと、期間なんですが、十一月の中旬から十二月の中旬といふ
ことなんんですけど、もしもう一ヶ月延長をお願いした場合は？」

「まあ、決まってなかつたら本当は困るんですけど、次に勤める会

社が決まってなかつたら続けさせてもらいます

「ありがとうございます」

そう言つてチョッキはもう一度頭を搔いた。

「一週間から十日の間に結果のほうは」連絡させていただきますので

「よつぽど人手がないみたいやで」

スエットに着替えながら妻に言つた。

「せやけど、重たいもんは持ちたくないとか贅沢言つてたら、こりゃ使いもんにならん言つて・・・」

ここまで言つて、妻は、しまつたと顔をした。

製本会社でのアルバイト以来、俺は、使い物にならない、と言つ言葉に敏感になつていた。

「アホかっ！」

ほとんど喧嘩腰だつた。

「集配業務はできませんか？友達を紹介していただけませんか？残業をしていただけませんか？期間を延長していただけませんか？」

今日にでも来てもらいたい状況やぞ。

もしあかんかつたら、ほんまに俺はこの世の中から必要とされてへんて認めて死んだるわいっ！」

電話が鳴つた。

「お義父さんから」

妻が子機を俺に渡す。

「なんか面接の日時をお知らせしますつていうメールが何件か来てんぞ」

応募していた会社のうち、倒産から復活したスポーツ用具メーカーと、メーカーの現業部門にブラジル人を派遣する派遣会社、それと会員制のリフォーム会社から、書類選考に通つたので面接を受けに來い、という知らせが來た。

「あんた文句言つたけど、あのなんとか言つ派遣会社の人の言つ通りやんか。

やっぱり、派遣会社の、なんとかアドバイザーなんか、あんたの歳で受けても無理なんやん。

最初から、普通の営業職受けといたら良かつてん」

言いながら妻がテーブルに置いた野菜炒めを見た娘が「またおんなじや」と言つた。

「よつしゃ、今週の土曜日工キスピランド行こか

やつたー、と言つて娘は喜んだ。

俺も一緒に、やつたーと言つて喜びたかった。

やつと運氣が巡ってきた、そう思うと、いつもは、妻の顔色を伺いながら冷蔵庫から取り出していた缶ビールを、当たり前のようになり出し、勢い良くプルトップを引いた。

8

駅から十分ほど歩いた、雑居ビルに毛の生えた程度のビルの中に、会員制のリフォーム会社の事務所はあった。

エレベーターを降りると、その会社名に大阪出張所と付け足された白いプレートの貼られた扉をノックした。

「面接に参りました山田と申します」

十坪もない、事務所と言うよりはブースと言つたほうが良さそうな狭い事務所の間仕切りの向こうからスース姿の男性が「お待ちしております」と言つて出てきた。

名刺に課長補佐と書かれたその男性は、辞めた会社の役職も同じなら、歳も同じ位だった。

「どうぞお掛けください」

椅子に腰を下ろすと間仕切りとの間に隙間はなかった。

「会社の概要ですか仕事の内容などは募集要項を読まれていてほとんどない存じかと思いますが、もう一度じゅうらのビデオ見ていただけてご確認ください」

下手な鉄砲を数撃つのに忙しく、ほとんど募集要項など読んでいなかつた俺はその三十分程度のビデオを真剣に見た。

「だいたいご理解頂けましたでしょうか？」

「ええ」

「何がご質問とかは？」

「会員さんは大体どれくらいいらっしゃるんですか？」

「約五万世帯です。」

年間会費を三千円頂いていますので、それだけでも一億五千万円になります」

「へーっ、すごいなあ。」

せやけど、それだけの数の会員、どうやって集めたんですか？飛び込み営業は一切無いつて書かれてましたけど」

「各家庭で処分できなくて困っていた不用品を一律一千円で引き取つたと言うか買い取つたんです。」

そうしましたら、皆さん大変有り難がつていただきまして、いや実はリフォームもやつてているんです、会員制なんですけど、と言いますと、じゃあ入らせていただきますと気持ち良く言つていただきまして」

「うまいっ。」

そのやり方は誰が考えはつたんか知りませんけど、うまこやり方ですわ。

うちにもこわれたテレビが長い間ほつたらかしになつてるんですけど、引き取つてもらおうと思つたらお金掛かるし、無料で引き取つてくれるつていうチラシが入つてつたんで電話したら、お宅の機種は古すぎて引き取れませんて言われるし」

「リフォームといつても、いきなり何百万や何千万もあるリフォームをさせてくださいつて言つのではなく、会員様が台所の水道の蛇口の締まりが悪くなつたと言われば飛んでいつて修繕し、お年よりの方が蛍光灯が切れたけどもう椅子に乗つて取り替えるのが恐いと言われば、すぐに行って取り替えてあげる。そうやって信頼を

得て、じゃあ家のリフォームもお願いしようかしらって言つてももらえるように努めているんですね」

「なるほどね。

それはうまいやりかたですね。

せやから、飛び込みの営業は一切無いつて書かれてたんですね」「そうです。

ですから、どちらかと言えば、攻めの営業と言つよりは守りの営業と言つた感じですね。

会員様のご要望に忠実にお答えし、その中から新たなビジネスチャンスを見つけていく。

もちろん新規開拓も大切です。

但し、こちらからお声を掛けるといつよりは、不用品の回収依頼のお声を掛けていただくとすぐに馳せ参じる。

とにかく、お客様の声に忠実に答えるんですね

「いや、正直なところ、リフォーム会社言つたら、最近色んなことがあったから、なんかうさん臭いんちゃうんかなと思つてたんですねよ。

せやけど、お話を聞かせてもらつたら、そんなん全部吹き飛びましたわ」「

すがすがしい気持ちだった。

久しぶりに他人といつぱい喋つた。

やつぱり営業マンは喋つてなんぼや、そう思つた。

駅ビルの地下で、コーヒー付き七百五十円の日替わり定食を食べ、地下鉄を一駅乗り継いで、三年前に一度倒産したスポーツ用具メーカーの説明会が行なわれるビルにたどり着いた。

ビルはオフィス街のど真中にある大手生命保険会社が保有する十五階建てのビルで、さつきのリフォーム会社が入っていたビルとは雰囲気が大きく違つた。

説明会会場に入ると、一人掛けの長机が縦に六列、横に三列並べ

られており、空いている席は一番後ろの真中の机の一席だけだった。席に着いて前を見渡すと、最近若ハゲの人気が増えてきたとは言え、全体の三分の一以上の人の頭の頂きが寂しい状態になっていた。

「予想以上の『ご応募』のため説明会を開かせていただきます」ネットにそう書かれていたのを思い出した。

昔は、テレビコマーシャルも流れていって、もし、街中を歩く人に聞くとほとんどの人が社名を知っていると答える企業とはいえ、三年前に一度倒産、破綻した会社である。

だから、先方も“予想以上”と言う言葉を使った。

テレビを見ていると、やたらと閣僚の先生方が「平成不況は今踊り場にさしかかっている」と言っているが本当だらうか。

踊り場にたどり着いたとしても「日本」と言う建物 자체がずぶずぶと地盤沈下を起こしているような気がしてしようがなかつた。

説明会が始まった。

同じ年くらいの男性がOHPを使いながら、たどたどしく会社概要を説明する。

「昨日の夕方、いきなり、明日大阪へ行つて会社説明会で喋つてくれつて言われましたので、一部お聞き苦しいところがあると思いますがご了承ください」と言って緊張した空気を解きほぐしてくれたその男性は、辞めた会社の同期入社だった竹井を思い出させた。

“竹井”は、三年前に会社が倒産したことを少し苦笑いを浮かべながら説明し、その後かなりの苦労の後、アメリカの融資会社の支援を受けてなんとか会社として復活することができたと述べ、会社概要の説明が終わると具体的にどんな仕事をしてもらうのかを説明し、最後に「私入社以来ずっと人事畠を歩いてきて営業活動はやつたことが無いんですけど、やりがいはかなりある仕事だと思います」と結んだ。

簡単なアンケート用紙を配られ記入していると“竹井”が「もし本日面接をご希望される方がいらっしゃいましたらこの後受付させていただきます。但し、誠に申し訳ありませんが、本日私を含めま

して担当させて頂く人間が一人しかおりません。それに、人使いのかなり荒い会社でして、今日中に必ず東京の社のほうに戻つてこいと言われている関係」会場に笑いが起きる。「今一時を回つたところから、そうですねえ、六時ののぞみには乗りたいと思いますので、あ、すいません、細かいこと言って」また笑いが起きる。「五時までとして三時間、お一人三十分として六名の二人いるから十二名、そう、誠に申し訳ありませんが、十一名の方のみ本日面接をさせていただきます。但し、来週のこの時間に二回目の説明会をここで行ないます。今度は社長とまでは言いませんが、いる人間をとにかく引っ張り出しますので」またまた笑いが起きる。「どうしても今日でないと都合が悪い、妻が来週出産予定日なんです、と言う人以外はできましたら来週でお願いします」

皆笑つたが、俺は笑わなかつた。

通るかどうか分からぬ会社を受けるのに、往復四百六十円も掛けてまた同じところになんか来たくもなかつた。

慌ててアンケートに答える。

しかし、皆、説明会の時から少しづつ書いていたのか、一人、また一人とアンケート用紙を裏向け席を立つ。

『今回の説明会の感想を自由に書いてください』

“・・・・・感動した・・・”

どこかの国の首相の受け売りを殴り書くと、周りの目など気にせず、ドタドタドタと出入口に向かつて突進した。

「一時間以上お待ち頂くことになりますけど・・・」「大丈夫です」

一つだけ空いていた喫煙席に腰を降ろすと煙草に火を着け携帯電話でメールを打つ。

面接受けて帰るわ、六時頃になる

窓の外をスー^ツ姿の人人が足早に通りすぎる。

この世界にまた戻つて来たいなあ・・・。

ビルに戻り、喫煙ルームで煙草を吹かしていると“竹井”が「山田さんですか？ 長い間お待たせいたしました」と言つてやつてきた。

部屋に入ると意氣なり“竹井”は「山田さん、こんな大きな会社行つてどうして辞めたんですか？」と聞いてきた。

「まあ、色々あります・・・」

後はいつも通りの回答をした。

「そうなんですか・・・いやあ、もったいないなあ・・・どうですか就職活動のほうは？」

「いやあ、思つた以上に苦戦してます。

歳なんか、ほとんどが書類選考で落とされますわ

「えーっ、そうなんですか？」

K大学を出られて何社も渡り歩いているわけでも無いし

「いやあ、やっぱりもう三十八歳いのはダメなんですよ」

「そうかなあ・・・いや、私も山田さんと同級生なんですけど、本

当にそんなものなんですかね・・・」

「（嘘やと思つんやつたら一回会社辞めてみはつたら）そんなもんですよ」

そのあと面接は“竹井”とのたわいない会話に終始し、面接と言うよりは、喫煙室で久しぶりにあつた同期入社の人間との立ち話、という感じだった。

「来週の面接が終わつてから選考を始めますので、一週間ほどで結果をお知らせします」

「これ、郵便局からのやつ」

妻は机の上に封筒を置いた。

「どうする、もづご飯食べる？」

「いや、今日は喋り疲れたから、先ビール飲まして

妻は箸とカレーの煮つけの乗った皿を持ってきた。

「どんな感じ?」

「まあ、あんなもんやろな。

「どうちとも同じ歳くらい、片一方なんか同級生やつたよ、面接してくれた人が。

「気持ち良くなれたらし、俺の気持ちもわかつてくれたんぢやうかな」

「あんた、馴れ馴れしい喋つたんぢやうの?」

「なんぼ歳がいっしょくらいやから喋つても、向こうはあくまでも面接官やねんで。」

「あなたは試験受けてる受験生やねんから、その辺わざわざで喋らんど、なんや馴れ馴れしい奴やなつて思われるで」

「アホか。

営業マンは喋つてなんぼやねん。

「初対面の人間と会つても、なんやかやなしに喋つて、その場を取り繕わなあかんねや」

「それはそりやけど、やつぱりある程度わきまえんと。もしあんたが面接官やつたらどうゆづつ」

「黙つておどおどしてゐ奴よつはマシやとゆづつなどな……」

「そりかなか……」

9

「あんたじや話ならへんわ、責任者と代わつてくれ」

「巡つてきたと思われた運氣は、ことも簡単に逃げ去つた。すいません、今ちょっと席を外してゐんですけど」

「じゃあ、その次の人と代わつて」

「そういうものはいりませんけど……」

「面接から十日掛かってきた郵便局からの回答は“採用”だつたが、働く期間が十一月中旬からではなく十一月中旬からになつていた。
「せりお宅にもな、人を雇うほつの都合つてのがあると思つけど、いつからはじめて働くほつの都合つてのがあるんや。ここまでに二

れだけの金がほしい、だから探して面接受けに行くんや。まだ俺の場合はなんとか生活やりくりして凌ぐけど、中には、あんたんとこで働いたお金を年末からの旅行のお小遣いに充てようと思つてた人がおつたかもしれん。そんな予定が全部狂つてしまつて、へたしたら旅行に行かれへんよつになつてあんたら訴えられるかもしれんで」

ですから、予定以上の応募があつたものですから・・・
「それやつたらそれでもつと早う連絡頂戴なあ。

人の人数くらい十〇分もあつたら数えられるやう。

それやつたら、「こんな無駄な十日間過」せんと、次の仕事探せたんや。

おまえらそんなんやから民営化されるんじやつ！――

「このボケがつ――！」

「そんな大きな声で怒らんでもええやんかつ。
周りの家にもまる聞こえやでつ！」

ベランダで洗濯物を干していた妻が慌てて居間に戻つてきた。

「アホかつ！――

「世の中、なんか、おかしなつてもうとるんじやつ！」

更に、その十日後、本社が栃木県にあり、社長の来阪にあわせるため一番最後になつていた、メーカーの現業部門にブラジル人を派遣する派遣会社の面接を受けに行くためマンションのエレベーターを降り、いつもは滅多に開けない、エントランスホールにある郵便受けを何気なく開けると、大きな封筒が一つ入つていた。

駅に向かつて歩きながら封を開けると、それぞれの封筒から、履歴書と職務経歴書が出てきた。

それらと全く同じ内容が書かれた真新しい履歴書と職務経歴書の入った鞄に放り込むと、赤信号の横断歩道を煙草に火を着けながら渡つた。

「お待たせしました」

ここ何年すっかり珍しくなつた、若い女性社員に入れてもらつた熱い緑茶を飲んでいると、五十歳くらいの恰幅の良い男性が、間仕切りで仕切つただけの応接室に入ってきた。

名刺に書かれてある“取締役社長”という文字に背筋が伸びる。「もつたいないねえ」

社長の第一声だった。

「滋賀県にも工場ありますよね」

「はい」

辞めた会社の話だった。

「今はないんですけど、昔は結構な人数を入れさせてもらつてたんですよ」

「そうなんですか」

「今でも結構入つてますよね？」

「ええ。

私もずっと営業やつてたんですけど、納期トラブルとかでたまに現場へ行つたら、日本人の作業員探すのによつ苦労しましたから」「よく働くんですけどねえ、まだ平均するどいつも日本人よりは・・・」

「そりなんですよね。

中には日本人より優秀な人もいて、検査ライン一つ任せられてるような人もいたんですけど、今社長さんがおつしやられたように平均するどいつも・・・よう現場の係長が愚痴こぼしてましたね」「だから、うちも少しでも質の良い作業員をと思って色々やつているんですけど、まだなかなかうまくいかないところがあるんですよ」「朽木にも工場があつたんですよ」

引き続き辞めた会社の話。

「そつちは滋賀の工場とは桁違ひにブラジルの方が多くて、昼間の食堂なんかは日本人よりブラジルの方のほうが多くて、食堂の自動販売機のコーラが一日で売り切れる言うてよ売店の人間が笑つて言

うてました」

「一年働いたら、帰つていい暮らしができるんですからね。そりや頑張つて働きますよ」

「残業が無かつたら文句言いつつも言つてましたからね。

それに、笑い話ですけど、休みの日にソフトボール大会を開いたらしいんですよ。親睦を深めようということでお弁当付き、飲みものはジュース、ビールのみ放題。そしたら、集まってきたんはラジル人の家族ばかりで日本人の家族はほとんど来なかつた。急きょソフトボール大会がサッカー大会に変更になつたらしいですよ」

「ははつ。

昔とは違いますからね。

休みの日まで会社の人間の顔は見たくないつていう気持ちもよくわかりますけどね。

国が豊かになることつて本当に良いことなのか考えさせられますね」

社長は湯飲みに口をつけた。

「で、山田さんは、東京でのお仕事の経験もあるんですね？」

「はい、三年だけですけど」

「もう一度向こうでつてのは如何ですか？」

「うーん、できたら避けたいですね」

「そうですか。

で、山田さん、この大阪の[宅]宅は賃貸ですか、分譲ですか？」

「分譲です」

「お子さんは？」

「娘が一人います。小学校一年生です」

「山田さんねえ・・・」

社長はもう一度湯飲みに口をつけた。

「ご家族皆さんで向こうへ移るつていうのは？」

「ちょっと無理ですね。」

娘の学校の問題もあつますし、エーハウスもとなつたら単身赴任ですね

「そりですか・・・いえ、山田さんねえ、やっぱり関西、特に大阪はかなり冷え込んでいるんですよ。

せいぜい、三重が少しましなくらいで、今一番元気な名古屋か、それかやつぱり関東へ行かないダメなんですよね。

「つむじもひつやつて大阪に事務所を構えているんですけど、正直仕事はさうぱりなんですよ。ですから、できれば栃木のほうでやつてもうえないかなと思つてこるんですけど・・・」

「ここので、じゃあ頑張らせていただきまーす、といえれば採用が決まつていただろう。

「単身赴任もいいんですけど、子供さんもまだ小さこし、まだまだ、お可憐いでしょうか？」

違つ土地に行つて新しい仕事を始めるとなると色々と「苦労がある」と思つんですね。

そんなときにやばに「家族の方がいるのとこないのとでは違つと思うんですね。
だから、もし行つてもひつとなると「家族皆とさで行つてもひつたいんですよ」

言つと社長は「ーんとこつ顔をして俺の履歴書と職務経歴書を睨み付けた。

「山田さん、営業にこだわらずに、総務だと人事とかでもかまわなーい？」

「はい、経験は少ししかありませんけど」

もう一度社長は「ーんと唸つた。

「やっぱりね、山田さん、大阪に固執すると難しいですよ。うん、難しい」

最後は自分に言つ聞かせるよつて社長は言つた。

「たまには外へ食べに行かへん?」

妻はいつも「どうやったん?」の代わりに言つた。

「金あんのんか?」

「お好み焼き食べるくらいのお金やつたらあるよ」

店に入ると、まだ時間が早いせいか客はほかに誰もいなかつた。娘は久しぶりの外食にはしゃいでいる。

「ビール一杯だけ飲ましてな」

ソースの焦げた匂いがたまらない。

家族三人でお好み焼きをつつく幸せ、今まで思つたことなんかかつた。

「ええ社長さんでな、色々と話しさしてもらつたんや。

結構評価はしてもらつたとは思うんやけど、たぶんあかんと思つわ。

もう大阪に固執するのはあかんかもしれんわ。

真剣に、単身赴任で名古屋とか東京へ行くことを考えんとな

「この前受けたとこの返事は来たん?」

「あかんかった。

今日、履歴書と職務経歴書戻つてきたわ。

ええ感触やつてんけど、あんたの言つ通り、あまりにも馴れ馴れしく喋りすぎたかもしれんな。

謙虚さが足りんのかな?」

四日後、メーカーの現業部門にブラジル人を派遣する人材派遣会社から、履歴書と職務経歴書が送り返されてきた。

「もうほんまにこの世の中から必要とされてへんかもしれんな」

妻は何も言わなかつた。

「ちょっと散歩行ってくるわ」

財布の中を見ると千円札が一枚あつたのでいつものガード下の飲み屋に向かつた。

一時からやつていい店は、まだ一時を回つたばかりだったが満員の一歩手前の賑わいを見せていた。

十一月の下旬並の寒さになると気象庁が予想していた通りの寒さになつた中を二十分ペダルを漕ぎ体が冷え切つていて、ビールはバスして一合の熱燗と、おでんの厚揚げと大根を頬んだ。

途中のコンビニで煙草を買つたついでにとつてきただった無料のアルバイト専門の求人誌を開く。

一ヶ月間だけの仕事などは皆無で、短期と言えば、やはり、仲介業者に登録して仕事を紹介してもらつものばかりだった。

熱燗を流し込む。

ポツと胃の中で熱の花が開く。

“マンガ喫茶

18歳～35歳位まで

22：00～5：00

時給950円

週3、4日勤務できる方

短期可

「ちょっと電話してくるんで」

通りがかった店員に声を掛ける。

ありがとうございます。

マンガ喫茶ポエム、谷崎でございます

「あのう、求人誌見て電話をせてもうつたんですけど、三十八歳なんですけど大丈夫ですか？」

はい、大丈夫です。

失礼ですが、今何かお仕事のほうは？

「一月に会社を退職しまして、現在就職活動中なんですね」

わかりました。

勤務は週に何日くらい可能ですか？

「そうですね、もう歳なんで、三日か頑張つて四日くらいだと思つんですけど

ありがとうございます。

期間は長期でしょうか？

「いえ。

次の仕事が見つかるまでの間だけお願ひしようと思つてゐるんですけど」

それは大体どれくらいの期間になりますか？
「そうですね、うまく見つかっても今からだと最低一ヶ月は掛かると思うんですけど

それはちょっと無理ですねえ。

短期といつても、最低三ヶ月は勤務していただかないと、やつと慣れてきたと思ったときに辞められるとうちとしましても

「そうですか・・・」

誠に申し訳ないんですけど、また、お願ひいたします
店に戻ると、残っていた熱燗をあおりもつ一本追加した。

厚揚げと大根で一合徳利を三本開けて店を出ると、陽がすっかり短くなつた晩秋の空はわずかな星をちりばめ、黒く塗り固められたいた。

さすがに、サドルにまたがりペダルを踏むと、自分ではまっすぐ進んでいるつもりが、自転車は右へ右へと逸れて行き、傍らを歩く通行人にぶつかりそうになりブレーキを握る。

目敏感くその様子を見つけた客引きの若い男が駆け寄つてくる。
「キヤバクラどうですか。

五十分四千円、飲み放題ですよ

無視して俺はペダルを踏む。

男はついてくる。

「可愛い子ようさんいますよ。

五十分だけどうですか？」

男は俺の腕を掴んだ。

「邪魔じやつ、ボケつ！！

俺は男を一喝し、その声に通行人全員が振り返った。

「なんやおっさん！！！」

男は俺の腕を離し、今にも殴り掛かってきたそうな形相だったが、すぐに他の同業者の男達が飛んでやつてきて止めに入った。

「調子のんなよつ、こらつ、いつでもシバいたんぞつ！」

俺は男にメンチだけを切ると、サドルに尻を降ろし、またペダルを漕ぎ始めた。

最寄りの駅の一つ手前の駅まで戻ってきたとき、久しぶりに興奮したのと、酒の飲み過ぎとで喉がカラカラになり、自動販売機でペットボトルに入ったスポーツドリンクを買つた。

一気に半分ほど飲み干し、もう一度蓋をして自転車の前カゴに放り込むと、とぼとぼと自転車を押して歩いた。

大きな黄色い電飾看板が見えてきた。

“ビデオ”

何年か前に一度だけ入ったことのある、アダルトビデオやアダルト雑誌を売っている店だった。

『アルバイト募集

20歳～35歳位

時給：800円

お気軽に応募ください』

「酒臭ーっ」

妻は居間に入るなり大きな声を出した。

「どんだけ飲んできたんよ」

「アホか。

一千円で飲める量なんかしれてるわ

「それにしてもすごい匂いやで。

『飯どうすんのん？』

「いらん」

娘が哀れみの目でこっちを見ている。

「もう寝るわ、蒲団敷いて」

「生命保険の会社からなんか電話あつたで」

妻が居間のとなりの寝室に入り、押入から蒲団を引っ張り出したながら言った。

「なんて？」

「切り替えの時期が来てるんで、中身見直してくださいって。一回来て説明したい言つてたで」

「の人らも歩合制やから必死なんやうなあ」

「また明日電話するつて」

「あつそつ」

「蒲団敷けたで。

「歯くらい磨いて寝えや」

「もうええわ、そんな力残つてないわ」

「そんなんしてたら、しまいに娘にも嫌われるで、父さん臭い一言うて」

「アホか。

「そんなこと言わへんよな」

と言つて、娘を見ると

「父さんはなんの仕事してんのん？」

といきなり娘が聞いてきた。

「今日学校で先生に聞かれたから、毎日家にこまつて答えたたら、先生が、夜のお仕事なんかなあつて言つてた」

「そうか。

「そしたら、もうお父さんは死んだ言つとけ」

「アホなこと言いなや」

蒲団を敷き終えて寝室から出てきた妻が俺の腕を掴んだ。

「もう酔っ払いは早よう寝え」

無理矢理蒲団に入れられた俺は「おいつ」と声を上げた。

「ほんまに死んだほうがええかもしれんなあ。

」のまま、うまいこと次働くところが見つかっても、給料はちょっとしかもらわれへんし、たとえ六十まで働けたとしても、中途採用

やから退職金もしれてるやうだから、おまえらにせえ生活をせいやれんからなあ。

それやつたら、もし今死んでみ、マンションのローンはチャラになるし、保険金も確かに四千万くらいは入ってくるはずやから、おまえもパートとしながらやつたら一人でなんとか暮らしていけるやう。それか、もうひとつ、五千万くらいに保険金増やしこか?」「増やしてくれんのは有り難いけど、あんまり毎月の保険料高なつたらしちどいで」

「よつしゃ、それやつたら一回生命保険のおばけやん呼んで色々なショミーレーションやつてもうね」「はいはい、わかったからもう寝え」

妻が寝室の襖を引くと、俺は掛け布団を被り、すぐに深い眠りに落ちた。

10

師走に入った。

夜は相変わらず眠れず、毎日と詰つていいほど、辞めた会社の人間が夢の中に現れた。

特に、反りの合わなかつた上司が多く、腕を組んでこいつをじつと見てくる。何か言ってやろうと思うが言葉が出てこない。そのうち上司は何も言わず姿を消してしまう。

就職活動は相変わらず何の進展もなく、ほとんどが書類選考で落ち、面接に進んでも、一週間以内には必ず履歴書と職務経歴書が戻ってきた。妻に言われる通り言葉づかいにも気を使い謙虚な気持ちで望んでもだ。

「山田さん、よつぱり歳なんですねえ」

そう言わればまだ納得はできるのだが、ただ“残念ながら今回は貴殿の希望に添えることができず・・・”では何かすつきりとなかった。

また、履歴書と職務経歴書を封書で返してくれるといひほマシな

ほうで、パソコンで“残念ながら・・・”の一言だけを送つてくるところ、もつとひどいところになると、履歴書と職務経歴書を送りといっておきながら、その後、何の返事も寄せないところがあった。ダメなのかどうなのか、ひょっとしたら何かのアクシデントで封書が届いてないんじゃないのかと心配してしまう、そんな非常識な会社もあった。確かに、結構な数の書類が届いて、処理をするのも大変だろうが、自ら募集しておきながら、相手に対しても何の返事もしないというのはどう考へても非常識だ。やはり、封書にて返送するのが常識だと思うのだが、そんな非常識な会社にすら入れない俺が言うと負け犬の遠吠えにしか聞こえない。

アルバイトも「次の会社が決まるまでの間なんですけど」で、全て断られた。

消費者金融からの借り入れも上限の五十万円まで後一万円に迫り、緊張感の無い毎日を送る中で、体重は生まれて初めて七十キロを超えた。

生命保険のおばさんはどうしても成績をあげたかったのか、十一月の最後の日に家にやってきて、一ヶ月の保険料がこれまでより三千円上がるだけで、死んだときの保険料が四千万円から四千五百万円に増える契約を俺から取り付け、スキップして帰つていった。

「今日も多分残業やから家におつたつてな」

妻は娘が学校から帰つてくる時間に合わせて午後一時までだったパートの時間を、午後四時までに延ばし、残業も進んでするようになつた、といふか、せざるを得なかつた。

「どう、どうか脈のありそうなとこあんのん?」「忙しそうに化粧をしながら妻が聞いた。

「あかんわ。

一部上場の企業なんか夢のまた夢、それどころか、インターネットで募集しているどこでもあかん。もづ、新聞の広告に載つてゐるようなとこしか無理ちやうかな。

今年はもう就職活動は終わりや。

なんぼやつても一緒にや。

叩けど叩けど、大きな扉の向こうからは誰も出でけんわ」

「もう一回高木さんにお願いに行つてみたら。もう、ビリでも入れるといやつたら行かせてもらいますって」

「そんな恥かきなことできるかよ」

「ほんま、年越されへんかつても知らんでも」

妻は言つと出ていった。

片側三車線の大きな道路を跨いで店を見る。

昼間だから“ビデオ”的看板に明かりは点いていなかつたが、店は開いている。

あたりに目を配りながら横断歩道を渡る。

父親の散歩コースにもなつてるので、もう一度前後左右を確認する。

採用

ゆづくつとペダルを踏みながら、店の前を通りすぎた。

アルバイト募集の紙はまだ貼つてあった。

しばらく行くと、誰も見ていないのに、あつ！と、何かを思い出したかのような芝居をすると、回れ右をして、来た道を戻った。

都合よく、店の扉の横に煙草の自動販売機があった。

財布から小銭を取り出しながら、横田で電話番号を暗記する。

自動販売機から煙草を取り出すとき、もう一度最後の確認をした。店から離れるとき、すぐに道を折れ、財布の中にしまっておいた小さな紙切れに電話番号を記入した。

「すいません、アルバイトの件で電話させてもらひたんですけど、三十八歳でも大丈夫ですかね？」

「あのう、申し訳ないんですけど、私はアルバイトなんでお困りないんですよ。社長は夜十時を回らないと来ないんで、お名前とか希望の曜日とかを書いてもらひ用紙があるので、それを書きに来てもらえますか？」

「夜八時頃でもかまいませんか？」

「はい」

「わかりました。

じゃあ、行かせていただきます」

「あのう、お名前は？」

「山田と申します」

「俺も落ちるところまで落ちたなあ。

Hビデオ屋でアルバイトやつて。

K大学まで行かせた親泣くで、ほんまに

「お父さんには言わんほうがええで」

「わかつてゐるよ。

おやじはまだしも、母親が聞いたら、ただでさえ体調悪いのに、口から泡吹いて倒れよんで。

駅前の本屋でつてことにしどくからあんたも話しあわせといてな

約束の時間に店の扉を押すと、すぐ脇にカウンターがあつた。

「今日お昼にアルバイトの件で電話しました山田です」

「はいはい」

背が百九十五センチはあるかと思われる二十代後半くらいの男性が愛想よくカウンターの奥から出てきた。

「じゃあ、こちらの用紙に記入していただけますか」
もともと下手くそな字が、緊張して、ミミズが這つたような字になつてしまつた。

“職業”の欄で一瞬手が止まつたが、血營業、と書くと「これでいいですかね？」と男性に用紙を渡した。

「はいはい、これで結構です。

そうしましたら、社長に渡しておきますんで、一、二日おひのうひ電話が入ると思います。あつ、電話はモモと携帯どおりがいいですか？」

「携帯のほうにお願いします」

しかし、四田たつても五田たつても、その社長さんから電話は掛かつてこなかつた。

「エビデオ屋まで落ちたんかなあ」「やつぱり歳がネックなんぢやうの」「せやけど、三十五歳“位”やで」「何か重たいもん持つ作業とかあるん違ひの？」「レジ作業だけやと思うで」「そんなことないん違ひ。」「商品の搬入とか大量にあるんぢやうの」「それでも、一日中やつてゐるわけぢやうやろ。

それに、ビデオ屋や言つても、今はもうほとんどのビデオ屋から、あんなん百枚あつたつて重きはしましてるで

「そしたらなんで電話掛かってけえへんのよ？」

「警戒してるんぢやうか。

「三十八歳、自営業、に」

「三十八歳、フリーター、よりはマシ違つ？」

「ひょつとしたら興信所がなんかに身元調査を頼んでたりして

「なんで、時給八百円で雇う人間にそこまですんのよ

「そら、そーやわな」

妻の言うことに納得した次の朝、消費者金融からの借り入れ限度額への残高一万円をコンビニのCD機から引き出し、開店早々のパチンコ屋で球を打つていると携帯電話が震えた。

液晶画面に写った番号に見覚えはなかつた。

履歴書と職務経歴書を送つてゐる会社は一社もなかつたし、第一、その番号は携帯のものだつた。

はい

パチンコ屋から掛けていると悟られないよう店から離れて、着信履歴の一一番上に並んでいる番号を液晶画面に並べると、すぐに中年の男性の声が返つてきた。

「山田と申しますが今お電話頂きましたでしょうか？」

「あつ、山田さん、ご連絡遅くなつて申し訳ないです。

ビデオショップ・サライの竹本です

ビデオ屋の社長だつた。

急で申し訳ないですけど、今晚「都合はどうですか？」

「あつ、大丈夫ですけど」

じゃあ、七時に履歴書だけ持つて店のほうへ来てもらえますか

七時十分前にビデオ屋に着くと、社長はまだ来ていなかつた。

「商品でも見といてください」

カウンターの中の、四十一、三歳位の男性が言つた。

自分より年上の人人がいるとは思つてもみなかつたので、少しほつとした。

カウンターから見て、店内の右半分は雑誌のコーナーで、左半分は、店の表の看板はビデオとつたつていたが、実際はほとんどがDVDだつた。

雑誌の表紙の女の子はまだしも、DVDのパッケージの女の子は目のやり場に困るほど露な格好をしていた。

若い子にはかなり刺激的な職場だなと思つていると「お待たせしました」と言つて竹本社長がやつてきた。

「だいぶ、『苦労されてるみたいですね』

店の上にある喫茶店で俺の履歴書を見ながら竹本社長は言つた。扱っているものがモノだけに、もし、そつちの筋の人ならどうしようかと思つたが、竹本社長は、五十歳半ばの、いかにも人の良さそうなおじさんだつた。

「奥さんは、こんなとこで働くのに反対はしませんでしたか？」

「いえいえ、そんな贅沢言える立場じゃないんで」

「今は就職活動中ですか？」

「いえ、一緒に会社を辞めた人間と商売しよか言つ」と始めたんですけど、なかなか軌道に乗らなくて・・・」

この嘘は昨日から考えていた。

「勤めてはつた会社の関係ですか？」

「はい。

まあ、ブローカーみたいな感じで、最終のコーナーさんと、自分が勤めてたとき担当していた問屋さんの間に入れてもらつてマージンを稼ぐ、まあ、伝票だけの仕事ですので、何か加工したり、在庫持つたりていうことはしないんですけど、「存じの通り大阪は今冷えきつてますんで、なかなか厳しくて・・・」

「まあ、山田さんらまだ若いから・・・」

（いえいえ、それが若くないんですよ。若かつたらこんなとこ来て

ませんから)

「私も今でこそこんな仕事しますけど、バブルん時は結構羽振りよつさせてもらつてたんですよ。それがバブルが弾けた途端、一緒にになって弾けてしもて・・・」

竹本社長は笑いながら言つた。

「せやけどね、この間、高校の同窓会があつたんですよ。

二十年ぶりやつたんかな。

女の子はね、ほとんど来てるんですよ、懐かしいなあって。

ところがね、男は半分も来てない。

日曜日ですよ。

本当に来れない用事があつたのか、それともビーチしても来たくない理由があつたのか。

名簿は事前に渡されてたんですよ。

そしたらね、意外な奴が出世してたりね、逆に、頭ええ言つて国立大学行つた奴がね、住所不定とか、聞いたこともないような会社行つてたいした地位にも着いてなかつたりするんですよ。

私もね、こんな仕事してるいうて正直にみんなに言つたんですよ。そしたら、おもういことやつてるなあ、人間なんかどうなるかわからんもんやな、食べていけたらそれでええねん、もう学校出てネクタイ締めてサラリーマンになつて定年までおんなじ会社で勤める時代やないもんねえ、つてみんなでワイワイガヤガヤ話しまして。山田さん、人生下駄履くまでわかりませんで。

まあ、頑張つてください。

仕事はレジ打ち、これはバーコード読んでもらつて、お客様さんがお金頂いて、商品を袋に入れるだけです。

あとは、商品の入荷と返品、これもバーコード読んでもらつたらいだけです。

お客様が入つてきいたら『いらっしゃいませ』、大きすぎず小さすぎず、あんた入つてきたんはわかつてますから、そんな程度でいいです。ここのお客はどこか恥かしめを感じてますから、商品を買つ

てもらつたときも『ありがと「う」わこました』、愛想良過ぎず不愛想でなく、ちよつとお地蔵さんのように、ただそこにいるだけ、つていう感じでお願いします。

まあ、K大学出ではる人には物足りん仕事やと思ひますけど、一つよろしくお願ひします

「あつ、こちらこそよろしくお願ひします」

採用決定。

「山田さん、明日から来れますか?」

「はい」

「そしたら、夕方六時ですけど、仕事のほうは大丈夫ですか?」

「(なんもせんとぶらぶらしてゐるだけですから) 大丈夫です」「じゃあ、よろしく頼りますわ」

頭を下げ、席を立とうとするが、竹本社長は俺を呼び止めた。

「子供さんは?」

「一人だけですけど

「お嬢ちゃん?」

「はい」

「いくつですか?」

「小学校の一年生です」

「まだまだ可愛いですよね」

「ええ。

だいぶ生意気になつてきましたけど

「家族は大事にせなあきませんで。

私、去年離婚しまして。

この歳になつて、自分で洗濯したり、トイレ掃除するなんか夢にも思ひませんでしたわ。

まあ、お互い頑張りましょ

玄関の扉を開けると、居間から娘が駆け出してきた。

「父さん仕事に行くの?」

「うん」

「行つたらあかん」

言つと娘は泣き出してしまった。

「今日は行かへんよ。」

「明日から」

「明日もダメ」

娘は俺のジーンズを掴むと更に大きな泣き声を上げた。

「行かへんかつたらみんなご飯食べられへんようになんねんで」
娘を引き摺りながら居間に入つていくと、妻が舌を出して笑つていた。

「友達のお母さんが言つてたわ」

ぐずる娘を寝かしつけ、居間に戻つてきた妻が言つた。

「ああ見えて子供いうのは、結構、環境の変化に敏感やねんて。
私も働きに行くようになつて、あの子学校から帰つてきてもん
たしかおれへんし、そのあんたが働きに行くつて聞いたから自分が
一人置いてきぼりにされるつて思たんちがう
「そなんか・・・。」

あいつにも迷惑かけてんねんなあ

「どうやつたん?」

危ない筋の人やなかつたん?」

「人の良さそうなおつちゃんやつた。」

色々苦労してはるみたいやわ。

『山田さん、まだまだ若いねんから』つて、久しぶりに若いって
言われたわ』

テレビのリモコンを押して娘が見ていたバラエティー番組を替え
ると、代わりに、二日前に、三十八歳で亡くなつた、平成の歌姫と
言われた女性歌手の追悼番組が流れていた。

バラエティー番組の中でハゲのずらを被つて頬を赤く塗つていた
お笑い芸人が、黒のネクタイを締め、神妙な顔つきで遺影に手を合

わせている。

“三十八歳といつ若さでこの世を去つた……”

「働く」と思たら歳やつて言われるし、死んだりまだまだ若いって言われるし。

いつたい、三十八歳でなんなんやろな」

六時十五分前に店に入ると、昨日いた四十一、三歳くらいの男性が「どうぞ中に入つてください」とカウンターの中に招いてくれ「内川です、よろしく」と頭を下げた。

「山田と申します。よろしくお願ひします」

「山田さん、そしたら、まず、レジ合わせ、やつてもらえますか」そう言つと内川さんはパソコンのキーボードを何回か叩いてレジを開け、カウンターの下から、よくコンビニの店員がレジで小銭を入れて数えている少し傾斜の付いた黒いプラスチックの入れ物を渡してくれた。

「それぞれの溝に小銭を入れていつてください」

一番上の目盛りが枚数になりますから。

私は札数えますので」

レジ金額は一発で合つた。

「山田さん、パソコンの方は?」

「ええ、そんな得意なほうじゃないですか、勧めてたときもやらされてたんで大体はわかります」

「じゃあ、そんな苦労はしないですよ」

言つと、内川さんはカウンターから出ていき、すぐに商品、裸の女性が露な格好をしてこっちを見つめているDVDのパッケージを持つて戻ってきた。

「簡単なんですよ。

まず、左上の 販売『F1』のキーを押してください。

そしたら担当者の欄へカーソルが行つたでしょ。

そしたらそこに山田さんのコード、5、を入れて『Enter』

のキーを押してください』

【担当者】と太い線で囲まれた欄を細い線で二つに区切った片方の欄に、5、そしてそのとなりの欄に“山田”という文字が現れた。
「後は、パッケージの裏に貼つてある細長いほうのバー�ードを読んでください」

ピッ、という音があると、あつといつ間に、十桁くらいの数字が並んだ商品コードと、とても言葉に出してはいえない商品名、そして、その単価と消費税が画面の枠内を埋めた。

「これ一本だけでしたら、左上の 合計『F1』のキーを押してください」

画面の真中に、上から【お預かり金額】【商品金額】【おつり】の三段に区切られた枠が現れた。

「【お預かり金額】の欄にカーソルがいつてますので、そこに実際に預かった金額を打ち込んで『Enter』のキーを押しても、ちらりと自動的にお釣りの金額が表示されますんで、最後にお客さんの年齢をだいたいで結構ですか、一十代やつたら『F2』のキーを、三十代に見えるんやつたら『F3』のキーを、四十代やつたら『F4』、それ以上やつたら『F5』のキーを押してください。そしたらレジが開きますんで。

後は、お釣りがあれば渡して貰えれば完了です。

あつ、それと、商品を袋に入れてもらう前に、パッケージの裏のもう一つのほうのバー�ードあるでしょ。真四角なやつ。それ、防犯タグって言うんですね。そのまま店から出ようとしたら店の入り口のところでブザーが鳴るようになつてるんですわ。結構万引きが多いんですよ。

それを、そのカウンターの下の黒いプレートの上に乗せてほしいんですわ。そしたら解除されて入り口のどこでもブザー鳴らないんですよ

「わかりました」「以上です。

何回かやつてもりつたらすぐ「に覚えないとおもいますんで。

そしたら、ちょっと商品見に行きましょか」

カウンターを出ると内川さんは、一棚一棚丁寧に説明してくれた。「メーカーって言つて、私はレーベル言つてるんですけど、そのレーベルだけでも二十以上あって、さらにその中で、色んなジャンルに分かれますから、正直言つて私らも、どこに何があるのかを完全には把握してないんですよ」

「そんなにあるんですか？」

「人それぞれ趣味が違いますから」

言つと内川さんは、棚から一枚のDVDのパッケージを取り出した。

“五十路白書 感じすぎるお義母様”

「山田さん、こんなん売れると思いません？」

パッケージには、しわくちゃの、下手をすれば六十路の女性が、体に何もまとわずにこちらを見て微笑んでいた。

「私やつたらどう間違つても買いませんね」

「普通はそうでしょ。」

いつもこのジャンルで言つたら“熟女”って言つんですよ」

「ええ

「これがね、結構売れるんですよ。」

「それもね、案外若い人が買つていいくんですね」

「ほんまでですか？」

「他にも、ロリコンや痴漢もん。それに盗撮もん、いわゆる、覗きつてやつですよね、それと後、じゅうかんつて言つのがね・・・」

「そのじゅうかんつて何なんですか？」

「じゅうかんのじゅうは、けもの、の、獣。じゅうかんのかんは、女三つ書いて、姦。」

「要は、動物と人間の女がナニをするやつなんですか」

「ええっ！？」

店の中を一通り説明してもらつて回つたが、内川さんの言つ通り種類が多くすぎて、ほとんど頭の中に残らなかつた。

「まあ、ちょっとずつ覚えていつてください。

レジが空いたときなんか、ぶらぶらと店内歩きに行つても、りひでどんな商品がどこにあるか見て回つてください」

「わかりました」

ドアが開いてお客さんが一人入つてきた。

「いらっしゃいませ」

面接の時に社長に言われた通り、大きず小さすぎない声で言った。

「あのお客さんはＳＭ専門ですわ

内川さんが言つた。

「そうなんですか？」

「ずっとやつてるよね、お客さんの好みもわかつてくるんですよ」

十分後、内川さんの言つ通り、そのお客さんは、縄で縛られた女性が赤い蠟燭を垂らされているパッケージを持つてレジにやつてきた。

一瞬笑いそうになつたが、こらえて、バーコードを読み、料金を告げ、お金を受け取りお釣りを渡し、商品を袋に入れ渡し「ありがとうございました」と愛想良過ぎず悪すぎない声で言つた。
♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

防犯タグを解除するのを忘れた。

「すいません、どうぞ行ってください」

入り口で立ち止まつたお客さんに内川さんが謝る。

「すみません」

客が出ていくと、俺は内川さんに謝つた。

「いえいえ、そんなん気にせんといてください。

私もショッちゅうやりましたし、今でもたまに忘れる」とがありまづから

その後、たくさんのお客さんが商品を持ってレジにやつてきたが、

作業を間違いなくこなすのに必死で、どんな顔をしたお客さんがどんな商品を買つていったのか全く覚えていなかつた。

「あつ、あのおっさん久しぶりやなあ」

五十歳くらいの、頭を角刈りにした作業服姿のお客さんが入つてきたのを見て内川さんが言つた。

「あのおっさんはねえ」と内川さんが言いかけたとき、店の電話が鳴つた。

「あつ、私出ますわ」

内川さんが受話器を手にした時、その角刈りのおっさんが、突然レジの前にやつてきた。

「にいちゃん、羊はあんのか?」

「はあ?」

「羊や羊つ」

「羊つて、あの、今流行りのジンギスカンつてやつの・・・」

「それは食べる方の羊やないか。俺が言つてんのは、犯るほうの、羊や」

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0870d/>

羊

2010年10月8日15時43分発行